

授業科目	医学総論（公衆衛生・精神保健含む）				
担 当 者	板倉登志子・山本永人・吉機俊雄・松井理直・木村晃大・塩見千夏・大西環・他				（オムニバス）
専攻（科）	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

言語聴覚士に必要な医学的知識について学ぶ。

■ 到達目標

言語聴覚士国家試験に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 専門基礎分野 基礎医学：呼吸系（木村）
- 第2回 専門基礎分野 基礎医学：神経系（木村）
- 第3回 専門基礎分野 音響学・音声学（松井）
- 第4回 専門基礎分野 社会保障制度（山本）
- 第5回 専門基礎分野 関係法規（山本）
- 第6回 専門基礎・専門分野 言語学・聴覚系：成人領域（塩見）
- 第7回 専門基礎・専門分野 音声学・聴覚系：小児領域（塩見）
- 第8回 専門分野 失語症概論（板倉）
- 第9回 専門分野 高次脳機能障害概論（板倉）
- 第10回 専門分野 失語症各論（吉機）
- 第11回 専門分野 高次脳機能障害：失行（吉機）
- 第12回 専門分野 高次脳機能障害：失認（吉機）
- 第13回 専門分野 高次脳機能障害：記憶障害（吉機）
- 第14回 専門分野 高次脳機能障害：注意・遂行機能障害（吉機）
- 第15回 専門分野 失語・高次脳機能障害：認知症（吉機）

■ 評価方法

筆記試験100% 2年間の履修科目の総復習
（国家試験と同形式の試験を2回実施、2回とも60%以上で合格とする。問題は五者択一形式）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

言語聴覚士過去問題を中心に分からないところを質問・確認し合って受験勉強を進めること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士テキスト
著者名：廣瀬肇 監修
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：言語聴覚士ドリルプラス失語症
著者名：大塚裕一、宮本恵美
出版社：診断と治療社

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	解剖学				
担当者	柴田雅朗				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

授業目的：言語聴覚士を志す学生に必要な解剖学の基礎を学ぶ。

授業内容：毎回、資料を配布して学習する。主に、神経系および呼吸器系を中心に解説し、要所でそれらを理解するための関連事項を学ぶ。

■ 到達目標

人体構造の基礎的知識を身につけ、分からないことは自ら調べ理解し、説明することが出来るようになる。専門科目を理解する際の礎とする。

■ 授業計画

- 第1回 神経系の基礎：神経系の区分、神経細胞、シナプス、刺激の伝達方向、灰白質と白質、神経節、神経膠細胞、脳の発生
- 第2回 中枢神経系1：脊髄、腰椎穿刺、脳幹（中脳、橋、延髄）
- 第3回 中枢神経系2：間脳、大脳（溝と葉、島、機能局在、大脳辺縁系、パペッツ回路）
- 第4回 末梢神経系：脊髄神経、デルマトーム、自律神経（交感神経と副交感神経）、脳神経
- 第5回 脳室系：髄膜、脳脊髄液 脈管系：心臓から出入りする血管、大動脈弓から出る枝、胸大動脈と腹大動脈から出る枝、脳に分布する動脈、ウイリス動脈輪、頸動脈小体と頸動脈洞、脳梗塞で起こる疾患
- 第6回 鰓弓：鰓弓から形成される骨・軟骨、神経、筋、器官。 頭部の筋：表情筋、咀嚼筋 口腔：唾液腺、舌、咽頭
- 第7回 胚葉：三胚葉から形成される組織・器官 呼吸器系：鼻腔、副鼻腔、気管および気管支、肺
- 第8回 発声：喉頭、喉頭筋、声帯、支配神経 嚥下：嚥下に働く筋、支配神経

■ 評価方法

筆記試験：100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で学習した内容について、配布資料や図書館蔵書のネッター解剖学アトラスを用いて、必ず復習を毎回行い、分からない内容がないようにする。分からないことは自分で調べ考えてみて（この行為が非常に重要）、解決がつかない場合は遠慮なく教員に質問する。

予習は余裕があればするが、それよりも復習を必ずやって欲しい。

■ 教科書

--

■ 参考図書

--

■ 留意事項

毎回、授業資料を配布しますが、随時、授業を聞きながら書き込みをして下さい。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	生理学				
担 当 者	宮井和政				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

生理学は人体の機能を学ぶ学問である。生理学の内容はかなり範囲が広く深いが、細胞の基本的な機能を概説したうえで、免疫系、循環器系、呼吸器系、消化器系、泌尿器系、内分泌系について各器官系ごとに基本的な考え方や重点事項を厳選して学習する。

■ 到達目標

- ・人体の各器官系の基本的な機能が理解できる。
- ・人体の構造を学ぶ解剖学や疾患を学ぶ臨床医学との関連が理解できる。
- ・人体の各器官系の協調した働きを俯瞰的に理解できる。

■ 授業計画

- 第1回 細胞の構造と機能
- 第2回 血液（免疫系を含む）
- 第3回 心臓と循環
- 第4回 呼吸とガスの運搬
- 第5回 消化と吸収
- 第6回 尿の生成と排泄
- 第7回 酸塩基平衡
- 第8回 内分泌

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業の前に授業項目に該当する教科書の単元を予め通読（予習）しておくこと。また、授業後は各回に配布する小テストに解答できるように復習しておくこと。

■ 教科書

書 名： 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学（第6版）
 著者名： 岡田 隆夫・鈴木 敦子・長岡 正範
 出版社： 医学書院

■ 参考図書

書 名： トートラ人体解剖生理学 原書11版
 著者名： 佐伯 由香・細谷 安彦・高橋 研一・桑木 共之 編集／翻訳
 出版社： 丸善出版

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	病理学				
担当者	橋本和明				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

疾患がどのような原因・メカニズムで発症し、臓器・組織にどのような変化が生じ、どのような機能障害を呈するかという病理学の基礎を理解する。

■ 到達目標

病理学の基本を会得し、医学の専門用語と疾病の病態を理解する。

■ 授業計画

- 第1回 病因について
- 第2回 退行性病変・進行性病変について
- 第3回 代謝障害について
- 第4回 循環障害について
- 第5回 免疫について
- 第6回 炎症と感染症について
- 第7回 腫瘍について
- 第8回 老化・遺伝・先天異常・奇形について

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で学んだ内容を教科書で復習するとともに、他の講義・実習で学んだ疾患についても常に病理学的な視点を併せて理解してください。

■ 教科書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 病理学 第5版
 著者名：梶原博毅・横井豊治・村雲芳樹
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	内科学（老年医学含む）				
担当者	藤岡重和・池田宗一郎・津田泰宏・下村裕章・大中玄彦				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

目的：著しい高齢化の進展に伴い医療・介護に対するニーズは年々高まっており、リハビリテーションに携わる医療専門職には、各種内科疾患の病態、臨床像、診断、治療に関する詳細な理解が必要とされる。本講では、代表的内科疾患について、その病因、病態、臨床像、診断、治療を理解することを目的とする。

内容：循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、腎疾患、代謝性疾患、内分泌疾患、免疫、アレルギー疾患、血液疾患について、その病因、病態を詳解し、疫学、臨床像、検査と診断、治療、評価、予後などについて幅広く学習する。また、内部障害を有する患者のリハビリテーション実施上の留意事項についても概説する。

■ 到達目標

1. 代表的内科疾患について、その病因、病態、臨床像、検査（画像検査、生理機能検査、血液検査等）と診断、治療、予後を説明できる。
2. 内部障害を有する患者のリハビリテーション実施上の留意事項を説明できる。

■ 授業計画

- | | | |
|------|----------------|---------------------------|
| 第1回 | 内科学総論 | 内科診断学総論、内科治療学総論 |
| 第2回 | 循環器疾患 | (1) 高血圧、虚血性心疾患、動脈硬化 |
| 第3回 | 循環器疾患 | (2) 心臓弁膜症、先天性心疾患、心筋疾患 |
| 第4回 | 循環器疾患 | (3) 心不全、不整脈、その他 |
| 第5回 | 呼吸器疾患 | (1) 感染性肺疾患、アレルギー性肺疾患 |
| 第6回 | 呼吸器疾患 | (2) 慢性閉塞性肺疾患、間質性肺疾患、肺腫瘍 |
| 第7回 | 消化器疾患 | (1) 食道疾患、胃の疾患 |
| 第8回 | 消化器疾患 | (2) 小腸、大腸の疾患 |
| 第9回 | 消化器疾患 | (3) 肝疾患 |
| 第10回 | 消化器疾患 | (4) 胆道疾患、膵疾患、その他 |
| 第11回 | 腎疾患 | 腎炎、腎不全、その他 |
| 第12回 | 代謝性疾患 | 糖尿病、痛風、脂質異常症、メタボリックシンドローム |
| 第13回 | 内分泌疾患 | 下垂体疾患、甲状腺疾患、副腎疾患 |
| 第14回 | 膠原病、アレルギー、免疫疾患 | 膠原病総論、アレルギー疾患総論、自己免疫疾患 |
| 第15回 | 血液、造血器疾患 | 貧血、白血病、出血性疾患 |

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

国家試験出題基準に基づき、実地臨床に則した内容を中心に授業を展開します。
事前学習として、シラバスに該当する領域の解剖学、生理学、病理学を復習しておいてください。内科学を学習するにあたっては、解剖学、生理学、病理学全般をよく理解しておく必要があります。また、次回授業までに、前回の授業内容をノートにまとめて十分に復習してください（60分程度）。疑問点については、各教員に質問し説明をうけるようにして下さい。

■ 教科書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 内科学 第4版

著者名：前田真治

出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 老年学 第4版

著者名：大内尉義

出版社：医学書院

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	小児科学				
担 当 者	原田大輔				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

小児の成長、発達、形態的特徴、生理的特徴、よく見られる疾患・見逃せない疾患を中心とした小児の病気、発達障害、子ども虐待などについて、言語聴覚士国家試験の出題範囲と教科書に準拠した内容を意識して述べる。講義内で実際の症例を提示することで、小児診療を疑似体験できる。

■ 到達目標

小児の成長、発達、生理、病理上の特徴を把握する。
小児疾病、小児保健等を理解する。

■ 授業計画

- 第1回 小児の成長と発達
- 第2回 小児保健
- 第3回 染色体異常と遺伝性疾患
- 第4回 新生児と周産期医学
- 第5回 神経疾患
- 第6回 筋疾患、骨系統疾患
- 第7回 消化器疾患
- 第8回 感染症
- 第9回 内分泌・代謝疾患
- 第10回 呼吸器疾患・免疫・アレルギー疾患・膠原病
- 第11回 腎・泌尿器疾患
- 第12回 血液腫瘍疾患
- 第13回 循環器疾患、眼科・耳鼻科疾患
- 第14回 心身症・神経症、発達障害学・障害児学
- 第15回 子ども虐待・不登校と子育て支援

■ 評価方法

筆記試験80%および授業中のレポート提出20%で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で使用する配布資料をもとに復習して理解を深めておく。
授業内容で不明な点があればメールで質問すること。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 小児科学・発達障害学 第3版
著者名：編集 宮尾益和／小沢浩
出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	精神医学				
担当者	高井田輪香子				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

さまざまな精神疾患について、症状・治療・経過・支援方法などについて学びます

■ 到達目標

精神医学に関心をもち、今後の臨床に生かせる基本的な知識を身につける

■ 授業計画

- | | | |
|-----|--------------------------------|----------------------|
| 第1回 | 精神医学総論 | 精神医学の歴史と現状・精神機能とその異常 |
| 第2回 | 精神医学各論 | 神経症性障害・摂食障害・心身症 |
| 第3回 | 精神医学各論 | 統合失調症・気分障害 |
| 第4回 | 精神医学各論 | 認知症・てんかん |
| 第5回 | 精神医学各論 | 物質関連障害・嗜癖性障害 |
| 第6回 | 精神医学各論 | 児童・青年期の精神障害 |
| 第7回 | 精神医学各論 | パーソナリティ障害・睡眠障害 |
| 第8回 | 精神科治療法・リハビリテーション・司法精神医学・地域精神医療 | |

■ 評価方法

筆記試験：100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

精神疾患ごとに事例を紹介しますので、授業用資料で症状や経過を復習し、疾患への理解を深めてください。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：改訂 第2版 専門医がやさしく語る はじめての精神医学
 著者名：渡辺 雅幸
 出版社：中山書店

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	リハビリテーション医学				
担当者	本多知行				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

・言語聴覚療法に必要なリハ医学の基礎知識や対象疾患を理解し、臨床場面でリハアプローチを実践できるよう基礎的事項の習得を目標に講義する

■ 到達目標

・言語聴覚療法に必要な医学の基礎知識とリハビリテーションの概要を理解しリハ対象患者の全体像を把握してアプローチできるような臨床的考え方ができるようになる

■ 授業計画

- 第1回 リハビリテーション医学の歴史を知り現在の考え方を身につける
(遠隔授業：オンデマンド配信)
- 第2回 障害とは何かを知り障害の階層性（ICIDH と ICF）とリハビリテーション医学領域を把握し評価の概念を知る
(遠隔授業：オンデマンド配信)
- 第3回 リハビリテーション医学における障害の評価1：（意識レベル・運動障害・感覚障害・高次脳機能障害など）
(遠隔授業：オンデマンド配信)
- 第4回 リハビリテーション医学における障害の評価2：（言語障害・知能障害・高次脳機能障害など）
(遠隔授業：オンデマンド配信)
- 第5回 リハビリテーション医学における障害の評価3：（高次脳機能障害など）
(遠隔授業：オンデマンド配信)
- 第6回 リハビリテーション医学における障害の評価4：（発達障害・心機能障害・呼吸機能障害・嚥下機能障害など）
(遠隔授業：オンデマンド配信)
- 第7回 リハビリテーション医学における障害の評価5：（歩行障害・ADL 評価・QOL 評価・障害者心理・臨床検査・画像診断など）
(遠隔授業：オンデマンド配信)
- 第8回 リハビリテーション医学におけるチーム医療と治療概念・職種内容、リスク管理などを知る
(遠隔授業：オンデマンド配信)
- 第9回 脳損傷（脳血管障害・頭部外傷など）による障害を理解しそのリハビリテーションの概要を述べる
ことができる
(遠隔授業：オンデマンド配信)
- 第10回 神経筋疾患（筋萎縮性側索硬化症・パーキンソン病・脊髄小脳変性症・筋ジストロフィー症など）
の障害を理解しそのリハビリテーションの概要を述べる
ことができる 1
(遠隔授業：オンデマンド配信)
- 第11回 神経筋疾患（筋萎縮性側索硬化症・パーキンソン病・脊髄小脳変性症・筋ジストロフィー症など）
の障害を理解しそのリハビリテーションの概要を述べる
ことができる 2
(遠隔授業：オンデマンド配信)
- 第12回 脊髄損傷（発症機転や麻痺の広がりなど）の障害を理解し、そのリハビリテーションの概要を述
べる
ことができる
(遠隔授業：オンデマンド配信)

- 第13回 小児（特に脳性麻痺）疾患・骨関節疾患（整形外科的疾患など）・切断の障害を理解し、そのリハビリテーションの概要を述べることができる
（遠隔授業：オンデマンド配信）
- 第14回 循環器・呼吸器疾患（心筋梗塞や慢性閉塞性肺疾患など）・認知症などの障害を理解し、そのリハビリテーションの概要を述べることができる
（遠隔授業：オンデマンド配信）
- 第15回 認知症の疾患や高齢者の特徴などを知りこれらの障害の理解とそのリハビリテーションの概要を述べることができる
（遠隔授業：オンデマンド配信）

■ 評価方法

レポート（3回）100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

レポートは宿題としますが、教科書を見ずに授業を学んでの自分なりの意見をしっかりと記載のこと。

■ 教科書

書 名：見て知るリハビリテーション医学
著者名：柳澤信夫監修・小松泰善編集
出版社：丸善出版

■ 参考図書

書 名：リハビリテーション医学テキスト（改定第5版）
著者名：三上真弘監修・出江紳一・加賀谷齊編集
出版社：南江堂

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	耳鼻咽喉科学				
担 当 者	藤木暢也・十名洋介・山崎博司・山本秀文・阪本浩一				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の基本的事項、耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の解剖学および生理学、疾患の病態および治療について解説する。

- ・聴器の構造と機能について理解する。(十名)
- ・中耳・外耳疾患とその治療について理解する。(山崎)
- ・内耳の解剖 平衡機能検査 めまい疾患各論 (山本)

■ 到達目標

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の基本知識の習得と、同領域の解剖学および生理学的知識ならびに主な疾患の病態や治療に関する知識を深める。

- ・聴器の構造と機能について理解する。(十名)
- ・中耳・外耳疾患とその治療について理解する。(山崎)
- ・内耳の解剖・機能を知るとともに平衡機能の概要を理解する。(山本)
- ・平衡機能を評価する検査について理解する。(山本)
- ・代表的なめまい疾患（良性発作性頭位めまい症・メニエール病・前庭神経炎など）についての理解を深める。(山本)

■ 授業計画

- 第1回 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学総論 鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖 (1) (藤木)
- 第2回 鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖 (2) (藤木)
- 第3回 鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療 (1) (藤木)
- 第4回 鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療 (2) (藤木)
- 第5回 聴器の構造と機能1 (外耳・中耳) (十名)
- 第6回 聴器の構造と機能2 (内耳・中枢聴覚伝導路) (十名)
- 第7回 中耳・外耳疾患とその治療1 (山崎)
- 第8回 中耳・外耳疾患とその治療2 (山崎)
- 第9回 内耳の解剖・機能 (山本)
- 第10回 平衡機能検査 (山本)
- 第11回 めまい疾患 各論1 (山本)
- 第12回 めまい疾患 各論2 (山本)
- 第13回 遺伝性難聴 その分類と診断 (阪本)
- 第14回 乳幼児の難聴：滲出性中耳炎からウイルス性難聴、聞き取り困難症 (LiD) /c まで (阪本)
- 第15回 新生児スクリーニング後の耳鼻咽喉科医の関わり：精密検査からその後の経過観察まで (阪本)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎回の授業後には、各自にて復習し、理解を深めておくこと。解剖は図示して復習するのが望ましい。

■ 教科書

書 名：Success 耳鼻咽喉科第2版
 著者名：洲崎春海 鈴木衛 吉原俊雄
 出版社：金原出版

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	臨床神経学				
担 当 者	小倉光博				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

スライドを中心に、臨床的に頻度の高い神経疾患を分かりやすく説明する。あわせて、神経解剖、神経性生理、神経症候学、神経放射線診断についても解説する。

■ 到達目標

神経解剖、神経生理などの基本的知識をもとに、臨床でよく経験する神経疾患の病態、診断、治療を理解すること。

■ 授業計画

- 第1回 神経解剖・神経生理（ミクロの解剖）
- 第2回 神経解剖・神経生理（マクロの解剖）
- 第3回 神経症候学
- 第4回 脳血管障害
- 第5回 脳卒中の疫学
- 第6回 パーキンソン病（疫学と症状）
- 第7回 パーキンソン病（治療）
- 第8回 神経変性疾患
- 第9回 感染性疾患
- 第10回 認知症（定義と診断）
- 第11回 認知症（症状）
- 第12回 頭部外傷
- 第13回 脳腫瘍
- 第14回 神経画像（正常画像の基礎知識）
- 第15回 神経画像（疾患画像の症例検討）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業の復習をし、分からないところは次回の授業で積極的に質問すること。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：ビジュアル臨床神経学
 著者名：永井知代子著
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	形成外科学				
担当者	横田 祐介				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

顔面・顎口腔領域の解剖・口唇裂・口蓋裂の治療
口蓋裂構音障害のメカニズム
顎変形症の病態と治療
口腔がんの治療と再建

■ 到達目標

口唇裂・口蓋裂の治療を知り、口蓋裂構音障害の実態が理解できる
口腔顔面の構造を知り、顔の変形やその再建法などを理解できる

■ 授業計画

第1回 顔面の構造と解剖
第2回 口唇裂・口蓋裂
第3回 顎変形症
第4回 唾液腺の機能と構造
第5回 口腔がんの治療
第6回 顎顔面の再建
第7回 国家試験対策
第8回 国家試験対策

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜講義中に指示をする

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：口腔外科学 第4版
著者名：白砂兼光・古郷幹彦 編集
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	臨床歯科医学				
担当者	山西整				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

言語聴覚士に必要な歯科の知識について学ぶ。

■ 到達目標

歯科の知識の習得と理解

■ 授業計画

- 第1回 歯科概論
歯と歯周組織について（発生、構造と機能）
- 第2回 歯と歯周組織について 1
疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周病、歯列不正、歯の欠損）
- 第3回 歯と歯周組織について 2
疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周炎、歯列不正、歯の欠損）
- 第4回 口腔、顎、顔面について
発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
- 第5回 顎関節、唾液腺について
発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
- 第6回 口腔ケアについて
歯科医学的処置（補綴、保存、歯科矯正など）について
- 第7回 口蓋裂治療と ST
- 第8回 口蓋裂治療と ST

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、疑問点は次の講義で質問をすること。

■ 教科書

書 名：最新言語聴覚学講座 臨床歯科医学・口腔外科学
著者名：道健一監修
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	口腔外科学				
担当者	森田章介				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

口腔・顎・顔面の構造と機能および口腔・顎・顔面領域の疾患・治療について講義を行う。

■ 到達目標

言語聴覚士として必要な口腔・顎・顔面の構造および口腔・顎・顔面領域の疾患・治療について理解する。

■ 授業計画

- 第1回 口腔外科学総論：医学・歯学の歴史、各種口腔外科疾患とそれらの診断と治療法
- 第2回 口腔・顎・顔面領域の先天異常、発育異常（後天異常）①
- 第3回 口腔・顎・顔面領域の先天異常、発育異常（後天異常）②
- 第4回 口腔・顎・顔面領域の炎症性疾患、口腔粘膜疾患
- 第5回 口腔・顎・顔面領域の損傷、顎関節疾患
- 第6回 口腔・顎・顔面領域の嚢胞性疾患、唾液腺疾患、神経疾患
- 第7回 口腔・顎・顔面領域の腫瘍および腫瘍類似疾患
- 第8回 口腔・顎・顔面領域の手術と機能回復、試験と解説

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

シラバスを参考に授業範囲を予習し、授業終了後はその日の学習内容を復習してください。

■ 教科書

書 名：最新言語聴覚学講座 臨床歯科医学・口腔外科学
 著者名：道 健一監修
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。講義受講にあたって：主にパワーポイントを用いて授業を行います。授業範囲に応じて資料を配布しますので、教科書を見比べながら復習してください。

授業科目	呼吸発声系医学（呼吸発声発語系の構造、機能、病態）				
担 当 者	本多知行・河合良隆・藤村真太郎				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

嚥下障害分野：嚥下障害の臨床に必要な医学的知識および支援のあり方について学ぶ。（本多）
 音声障害分野：音声障害の基礎及び臨床について、医学的な観点から講義を行う。（河合・藤村）

■ 到達目標

嚥下障害分野：嚥下障害の理解を深め、人間の根源的欲求である「口から食べる」という QOL の向上を目的として、言語聴覚士が支援できる技術と考え方を習得する。（本多）
 音声障害分野：音声障害のリハビリテーションを行う際に必要となる耳鼻咽喉科学的知識を習得する。（河合・藤村）

■ 授業計画

- 第1回 嚥下障害の理解のために必要な解剖・生理（本多）（遠隔授業：オンデマンド配信）
- 第2回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練1（本多）（遠隔授業：オンデマンド配信）
- 第3回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練2（本多）（遠隔授業：オンデマンド配信）
- 第4回 嚥下障害におけるチームアプローチと関連事項（本多）（遠隔授業：オンデマンド配信）
- 第5回 偽（仮）性球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ（本多）
球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ
- 第6回 変性疾患の嚥下障害に対する特徴とアプローチ（本多）
- 第7回 嚥下障害の重症度分類と最近の話題（本多）
- 第8回 咽頭の解剖と生理（1）軟骨／筋（河合）
- 第9回 喉頭の解剖と生理（2）神経／血管／咽頭・喉頭の内腔声帯（河合）
- 第10回 発声の原理 呼吸／声帯振動／声帯共鳴／構音（藤村）
- 第11回 音声に関する検査（1）（藤村）
- 第12回 音声に関する検査（2）（河合）
- 第13回 音声外科手術 音声障害をきたしうる疾患（1）（河合）
- 第14回 音声外科手術 音声障害をきたしうる疾患（2）（藤村）
- 第15回 無喉頭での音声再獲得と管理（藤村）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内容を、教科書と配布資料をもとにして復習しておいてください。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための音声障害学
 著者名：大森孝一
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：「摂食・嚥下リハビリテーション」第3版

著者名：金子芳洋 千野直一監修

出版社：医歯薬出版

書 名：「嚥下障害の臨床」第2版

著者名：日本嚥下障害臨床研究会監修

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	聴覚系医学（聴覚系の構造、機能、病態）				
担 当 者	金丸眞一				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

聴覚系の構造・機能・病態と疾患について解説する。

■ 到達目標

聴覚系の構造や機能を理解し、その疾患について言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 耳科学の概説と聴覚系の構造①（外耳・中耳・内耳）
- 第2回 聴覚系の機能①（外耳・中耳）
- 第3回 聴覚系の機能②（内耳）
- 第4回 聴覚系の機能③（聴神経と視聴中枢経路）
- 第5回 聴覚系の機能④（聴覚中枢機構、両耳聴能と方向感覚）
- 第6回 聴覚検査と耳疾患
- 第7回 聴覚器官の病態①（外耳・中耳疾患①）
- 第8回 聴覚器官の病態②（外耳・中耳疾患②）
- 第9回 鼓室形成手術
- 第10回 聴覚器官の病態③（内耳疾患①）
- 第11回 聴覚器官の病態④（内耳疾患②）
- 第12回 内耳再生医学
- 第13回 聴覚器官の病態⑤（後迷路・中枢性難聴疾患）
- 第14回 聴覚と音声・言語・音楽
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、分からないことは随時授業内で質問すること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための聴覚障害学
 著者名：喜多村健 編著
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	神経系医学（神経系の構造、機能、病態）				
担 当 者	宮井和政				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

神経系は、感覚の受容、情報の処理、効果器への指令を行う器官系であり、環境の変化に応じた反応を引き起こすために欠かせない情報伝達を担う。神経系は機能が部位ごとに異なり（機能局在）、その部位ごとが決まった経路で連絡している（伝導路）ので、神経系の働きと病態を理解するためには、主な機能局在と伝導路を把握する必要がある。この授業では、機能局在と伝導路に主眼を置いて、中枢神経系と末梢神経系の基本的な構造と機能について病態とも関連させて学習する。

■ 到達目標

- ・神経細胞の形態と情報伝達のしくみを理解できる。
- ・脳と脊髄の構造と機能、および主要な伝導路を理解できる。
- ・脳神経、脊髄神経、自律神経系の構造と機能を理解できる。
- ・中枢および末梢神経系の病態と検査の概要を理解できる。

■ 授業計画

- 第1回 神経組織・神経伝導のしくみ
- 第2回 神経系の概要と分類
- 第3回 脊髄の構造と機能
- 第4回 脳幹の構造と機能
- 第5回 間脳の構造と機能
- 第6回 小脳および大脳基底核の構造と機能
- 第7回 大脳辺縁系の構造と機能
- 第8回 大脳皮質の構造と機能
- 第9回 伝導路
- 第10回 脳血液循環と脳脊髄液
- 第11回 脳神経の構造と機能（1）
- 第12回 脳神経の構造と機能（2）
- 第13回 脊髄神経の構造と機能
- 第14回 自律神経系の構造と機能
- 第15回 中枢／末梢神経系の病態と画像検査

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業の前に授業項目に該当する教科書の単元を予め通読（予習）しておくこと。また、授業後は各回に配布する小テストに解答できるように復習しておくこと。

■ 教科書

書 名： 絵でみる脳と神経 しくみと障害のメカニズム（第4版）
 著者名： 馬場 元毅
 出版社： 医学書院

■ 参考図書

書 名：ブルーメンフェルト カラー神経解剖学 - 臨床例と画像鑑別診断 -
著者名：ハル・ブルーメンフェルト（安原 治 訳）
出版社：西村書店

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	臨床心理学Ⅰ（理論と分類）				
担当者	藤井章乃				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

臨床心理学についての人格理論、発達理論、心理アセスメント、心理療法を学び、その内容に基づいた実習や感受性トレーニングを行うことで自己理解、他者理解を深め、対人援助について具体的に考察する。

■ 到達目標

自己理解、他者理解を通して人間理解を深め、理想的な人間関係について考え、対人援助が実践できるようになっていくことを目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 臨床心理学とは何か
- 第2回 心とは何か
- 第3回 人格理論 フロイトⅠ
- 第4回 人格理論 フロイトⅡ
- 第5回 人格理論 ユングⅠ
- 第6回 人格理論 ユングⅡ
- 第7回 人格理論 ロジャーズ
- 第8回 人格理論 エリクソン
- 第9回 発達理論 マーラー・ウィニコット他
- 第10回 フロイト以降
- 第11回 精神医学 実習
- 第12回 精神医学
- 第13回 パーソナリティ理論
- 第14回 心理アセスメント
- 第15回 心理テスト 質問紙法

■ 評価方法

筆記試験 70% 授業後の振り返りの感想 30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内で適宜指示をする。

■ 教科書

書 名：心とかかわる臨床心理
 著者名：川瀬正裕 松本真理子 松本英夫
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	臨床心理学Ⅱ（査定と心理療法）				
担当者	藤井章乃				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

前期に引き続き、臨床心理学についての人格理論、発達理論、心理アセスメント、心理療法を学び、その内容に基づいた実習や感受性トレーニングを行うことで自己理解、他者理解を深め、対人援助について具体的に考察する。

■ 到達目標

前期に引き続き、自己理解、他者理解を通して人間理解を深め、理想的な人間関係について考え、対人援助が実践できるようになっていくことを目標とする。

■ 授業計画

第1回 心理テスト 質問紙法 実習
 第2回 心理テスト 投影法
 第3回 心理テスト 投影法 実習
 第4回 心理テスト その他
 第5回 心理療法 クライエント中心療法
 第6回 傾聴訓練
 第7回 精神分析療法
 第8回 分析的心理療法
 第9回 芸術療法
 第10回 芸術療法 実習
 第11回 森田療法 家族療法
 第12回 行動療法
 第13回 自律訓練法
 第14回 認知行動療法
 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験 70% 授業後の振り返りの感想 30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内で適宜指示をする。

■ 教科書

書 名：心とかかわる臨床心理
 著者名：川瀬正裕 松本真理子 松本英夫
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	生涯発達心理学Ⅰ（乳幼児期）				
担当者	宇野田陽子				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

乳幼児期から学童期までの各時期の発達の特徴について学び、臨床場面で子どもと出会ったときに子どものよき理解者となれるような知識を身につける。発達心理学に関する諸理論、各発達段階で経験されやすい心理的／社会的課題、子どもの育ちに関する時事問題などについても触れる。

■ 到達目標

乳幼児期から学童期までの発達の流れを大まかにつかむこと。各発達段階で重要な項目を理解すること。

■ 授業計画

- 第1回 発達とは 生涯発達心理学の考え方と歴史
- 第2回 発達の規定要因 研究法 発達課題
- 第3回 胎生期の特徴（生理、母親の心理と胎児の発達）、新生児期の特徴（知覚、認知、社会的能力）
- 第4回 乳児期の特徴①（知覚、認知、運動）
- 第5回 乳児期の特徴②（対人関係、情緒、前言語的コミュニケーション、愛着について）
- 第6回 幼児期の特徴①（遊び、認知発達）
- 第7回 幼児期の特徴②（社会性、「育てにくさ」、愛着について）
- 第8回 幼児期の特徴③（言語、コミュニケーションについて）
- 第9回 学童期の特徴①（知的機能、社会性）
- 第10回 学童期の特徴②（情緒の発達、発達障害、教育との関係性）
- 第11回 青年期、成人期、中年期、老年期について
- 第12回 発達理論と近年の心理的・社会的課題
- 第13回 子どもの育ちをめぐる動き（子どもの権利、インクルージョンなどの視点から）
- 第14回 児童虐待について
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験70％ レポート30％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

特に重要な点はその都度お伝えするので各自で復習してください。適宜、重要な文献、講演会や映画などの情報をお伝えするので、積極的に触れてみてください。小児の臨床を行うにあたって知っておくべき絵本やおもちゃなどについてもできるかぎり情報提供するので、実際に手に取るなどして子どもの文化に積極的に関心を持ってください。

■ 教科書

書 名：生涯発達心理学 認知・対人関係・自己から読み解く
 著者名：鈴木忠・飯牟礼悦子・滝口のぞみ
 出版社：有斐閣アルマ

■ 参考図書

書 名：発達の扉 上
 著者名：白石正久
 出版社：かもがわ出版

■ 留 意 事 項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	生涯発達心理学Ⅱ（幼児期～老年期）				
担当者	森田喜治・森田婦美子 他				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ・エリクソンのライフサイクルを中心に生涯発達の課題について講義し、それぞれの時期ごとにみられる子どもの心理的問題や精神的問題にも目を向けることによって人間の心の発達を概観する。
特に、受講者自身の過去の経験を振り返りつつ、体験的に人間の生涯発達を理解する。（森田善治）
- ・わが国では、急速な高齢化社会を迎えており、今後高齢者に対する世の中の関心はますます高まっている。高齢者の身体的・心理的・社会的特徴を理解した上で、今後ますます増加すると予測される認知症への理解を深め、言語聴覚士として必要なコミュニケーション技術について学びを深める。また、避けて通れない「死」についてタブー視することなく積極的に学ぶことを目的としている。（森田婦美子）

■ 到達目標

- ・①エリクソンの述べる発達課題について理解する
- ②各発達課題を経過する際に我々は様々な問題に出会う。それらの問題の形成を知ることで、人が成長することの難しさと、それ故に表現される心の叫びを理解する。
- ③発達課題を通過してきた受講者自身の体験を通して、生涯発達の理解を深める。
- ④言語、聴覚の障がいとされるコミュニケーションのハンディがもたらす心の叫びを理解する。（森田善治）
- ・①高齢者の発達段階が理解できる。
- ②高齢者の加齢性変化と疾病の成り立ちが理解できる。
- ③認知症の基礎理解とともに、コミュニケーション方法を学ぶことが出来る。
- ④言語聴覚士として「人の死」について考えることができる。（森田婦美子）

■ 授業計画

- 第1回 精神分析学の観点から母子関係を主体にした発達について（特に関係性に焦点を当てる）（森田善治）
- 第2回 エリクソンの発達課題を中心にして幼児期の発達課題及び心理学的問題（森田善治）
- 第3回 エリクソンの発達課題を中心にして児童期の発達課題及び心理学的問題（森田善治）
- 第4回 児童期の発達課題及び心理学的問題（特に虐待と学校における問題）（森田善治）
- 第5回 エリクソンの発達課題を中心にして思春期の発達課題及び心理学的問題（森田善治）
- 第6回 思春期の発達課題及び心理学的問題（思春期の不安定と精神的問題）（森田善治）
- 第7回 エリクソンの発達課題を中心にして成人期～壮年期の発達課題及び心理学的問題（森田善治）
- 第8回 成人期～壮年期の発達課題及び心理学的問題（家族の関係と壮年期の心理的問題）（森田善治）
- 第9回 老年期の発達課題・加齢性変化と病気の発症（森田婦美子）
- 第10回 老年症候群（森田婦美子）
- 第11回 認知症の基礎理解（森田婦美子）
- 第12回 認知症高齢者とのコミュニケーション（森田婦美子）
- 第13回 終末期ケア（森田婦美子）
- 第14回 死への対応1（講師非公表）
- 第15回 死への対応2（講師非公表）

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・発達というのは、概念的なものではなく、そこにはそれぞれの受講生が過去に通過してきた哲学がある。したがって、人に関する、あるいは、発達と心のありように関する様々な書物に触れながら、自分に目を向けるように心がける。本講義の課題であるレポートはそれぞれの自己に対する振り返りになるため、その際にどのような気づきを得たかが中心になるため、レポートの中ではその書物を参考にできるようにしていただきます。（森田善治）
- ・毎回の授業を受講するにあたって、指定された関連動画を視聴、学びをまとめておくこと。（森田婦美子）

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

- ・常日頃から、自身の対人関係、価値観や心に起こる様々な体験をしっかりと心に刻んでおくことで、自分自身を見直すよい体験になります。それらが、仕事上でも重要な指針を与えてくれるものですので、自分自身に対する客観的興味を失わないようにしてください。（森田善治）
 - ・講義に当たって、積極的に参加するようにしてください、講義中でも質問等がありましたら出していただければ活発なものになると思われます。自ら学ぶように心がけてください。（森田善治）
- 不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	学習・認知心理学Ⅰ（感覚・知覚・学習・記憶）				
担当者	小林穂波				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学の諸分野について解説する。前期は「感覚」「知覚・認知」「学習」「記憶」「対人認知」に関する内容を扱う。本講義では日常生活で身近に見られる例を多く紹介し、私たちの普段の行動（本を読む・人と話す・自転車に乗る…）がどのような認知機能に支えられているのか、理解を深める。

■ 到達目標

- (1) 人間の感覚・知覚・認知過程について概要を理解し、心理学の用語を用いてわかりやすく説明できるようになる。
- (2) 講義で扱った主要な概念・用語について理解し、心理学になじみがない人に対してもわかりやすく説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 認知心理学とは / 感覚 (1) : 感覚の種類・感覚可能範囲と感度・物理量と心理量
- 第2回 感覚 (2) : 網膜と視知覚 / 色彩の知覚
- 第3回 知覚・認知 (1) : 空間知覚 / 形の知覚 / 運動知覚
- 第4回 知覚・認知 (2) : 知覚の恒常性・知覚の統合と相互作用・知覚運動協応
- 第5回 知覚・認知 (3) : 注意・オブジェクト認知
- 第6回 対人認知 : 印象形成 / 対人魅力 / ステレオタイプ / 認知的不協和
- 第7回 記憶 (1) : 記憶の過程と分類
- 第8回 記憶 (2) : 短期記憶とワーキングメモリ
- 第9回 記憶 (3) : 長期記憶
- 第10回 記憶 (4) : 記憶の検索と忘却・記憶の歪み
- 第11回 学習 (1) : 古典的条件づけ
- 第12回 学習 (2) : オペラント条件づけ
- 第13回 学習 (3) : 様々な学習 (弁別学習・技能学習・社会的学習)
- 第14回 学習 (4) : 動機づけ
- 第15回 認知心理学の歴史と方法論 / 前期のまとめ

■ 評価方法

毎回の小レポート : 10% 期末試験 : 90%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義内で配布した資料を次回までに読み直して復習しておくこと。次週までに目を通しておくべき教科書の範囲は、毎回の講義で指定する。参考図書の該当部分もあわせて読んでおくことが望ましい。

■ 教科書

書 名 : 心理学 (第5版 補訂版)
 著者名 : 鹿取 廣人, 杉本 敏夫, 鳥居 修晃
 出版社 : 東京大学出版会

■ 参考図書

書 名：グラフィック認知心理学
著者名：森敏昭・井上毅・松井孝雄
出版社：サイエンス社

書 名：言語聴覚士のための心理学（第2版）
著者名：山田弘幸（編集）
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

受講生の要望や関心に合わせて講義内容を多少変更することがあります。本講義の内容に関する質問や要望は、小レポートの自由記述欄・メール等で伝えてください。

授業科目	学習・認知心理学Ⅱ（思考・言語）				
担当者	小林穂波				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学の諸分野について解説する。後期は「思考・知識」「言語」に関する内容を扱う。本講義では日常生活で身近に見られる例を多く紹介し、私たちの普段の行動（本を読む・人と話す・自転車に乗る…）がどのような認知機能に支えられているのか、理解を深める。

■ 到達目標

- (1) 人間の感覚・知覚・認知過程について概要を理解し、心理学の用語を用いてわかりやすく説明できるようになる。
- (2) 講義で扱った主要な概念・用語について理解し、心理学になじみがない人に対してもわかりやすく説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 前期の復習／後期のオリエンテーション
- 第2回 思考・知識(1)：知識の構造／概念
- 第3回 思考・知識(2)：問題解決／推論
- 第4回 思考・知識(3)：認知バイアス／表象
- 第5回 言語(1)：言語の特徴／非言語的コミュニケーション
- 第6回 言語(2)：言語理解と産出
- 第7回 言語(3)：言語使用と知識
- 第8回 学習・認知心理学Ⅰ・Ⅱのまとめ

■ 評価方法

毎回の小レポート：10% 期末試験：90%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義内で配布した資料を次回までに読み直して復習しておくこと。次週までに目を通しておくべき教科書の範囲は、毎回の講義で指定する。参考図書の該当部分もあわせて読んでおくことが望ましい。

■ 教科書

書 名：心理学（第5版 補訂版）
 著者名：鹿取 廣人，杉本 敏夫，鳥居 修晃
 出版社：東京大学出版会

■ 参考図書

書 名：グラフィック認知心理学
 著者名：森敏昭・井上毅・松井孝雄
 出版社：サイエンス社

書 名：言語聴覚士のための心理学（第2版）
 著者名：山田弘幸（編集）
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留 意 事 項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

受講生の要望や関心に合わせて講義内容を多少変更することがあります。本講義の内容に関する質問や要望は、小レポートの自由記述欄・メール等で伝えてください。

授業科目	心理測定法				
担 当 者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

言語聴覚士の仕事で用いられる各種心理測定法の意味に関する理解を深めると共に、人間の心理を客観的に把握する方法の必要性を理解するための基本的な内容を解説します。

■ 到達目標

言語聴覚士が臨床現場で用いている各種検査方法がどのような基盤を持っているのか、検査結果のデータを正しく処理するために必要なことは何かを正しく理解できるようになることを目指します。

■ 授業計画

- 第1回 測定と尺度
- 第2回 代表値・散布度・相関度
- 第3回 信頼性と妥当性
- 第4回 精神物理学的手法：調整法と極限法
- 第5回 精神物理学的手法：適応法・恒常法
- 第6回 評定法など、その他の心理実験手法
- 第7回 投影法とその問題点
- 第8回 精神物理学関数：Weber の法則
- 第9回 精神物理学関数：Fechner の法則
- 第10回 精神物理学関数：Stevens のベキ法則
- 第11回 信号検出理論
- 第12回 判断の確からしさの指標
- 第13回 正規分布について
- 第14回 統計学の基礎
- 第15回 統計学と実験計画法の関係

■ 評価方法

学期末のテストによって成績評価を行います、筆記試験での評価が100%となります。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は90分程度が必要です。また、復習時間は個人の理解度によりますが、1時間程度必要になるでしょう。

■ 教科書

書 名：プリントと web 教材を用います

■ 参考図書

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語学Ⅰ（音声学・形態論）				
担当者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

日本語の文字・形態素・文法、意味の性質について詳細な解説を行います。

■ 到達目標

日本語の形態現象・文法・意味について習熟し、各種言語障害を分析・理解する基礎的能力の涵養を目指します。

■ 授業計画

- 第1回 言語学・音声学の基礎
- 第2回 記号の哲学的性質
- 第3回 シニフィアンとしての音韻と音声
- 第4回 日本語の音韻について
- 第5回 日本語における各種文字の基本
- 第6回 漢字とかな文字の関係
- 第7回 形態素の導入
- 第8回 異形態と形態素の分類
- 第9回 形態素と語
- 第10回 合成語の性質
- 第11回 形態素と語種
- 第12回 連濁について
- 第13回 動詞後続形態素の性質
- 第14回 いわゆる「間違った」日本語の表現について
- 第15回 統語論の基礎

■ 評価方法

学期末のテストによって成績評価を行います。マークシート方式の試験での評価が100%となります。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は90分程度が必要です。また、復習時間は個人の理解度によりますが、1時間程度必要になるでしょう。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識「音声学・言語学」第2版
 著者名：今泉敏（編）
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：日本語音声学入門
 著者名：斎藤純男
 出版社：三省堂

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語学Ⅱ（文法・意味・社会言語学）				
担当者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

STにとって必要な日本語音声・音韻の詳細を説明します。

■ 到達目標

日本語の音声・音韻について習熟し、構音障害などを分析できる知識を身につけることを目指します。

■ 授業計画

- 第1回 言語記号に関する復習
- 第2回 意味論の基礎
- 第3回 格助詞の機能
- 第4回 自動詞と他動詞の項構造
- 第5回 動詞後続形態素の意味
- 第6回 調音の基本
- 第7回 調音位置と調音方法
- 第8回 国際音声記号の基本と発音記号の注意点
- 第9回 動詞後続形態素の性質
- 第10回 日本語の母音
- 第11回 日本語の子音：共鳴音
- 第12回 日本語の子音：阻害音
- 第13回 分節音の構造：モーラと音節
- 第14回 日本語の音調について
- 第15回 日本語諸方言のアクセント

■ 評価方法

学期末のテストによって成績評価を行います。マークシート方式の試験での評価が100%となります。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は90分程度が必要です。また、復習時間は個人の理解度によりませんが、1時間程度必要になるでしょう。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識「音声学・言語学」第2版
 著者名：今泉敏（編）
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：日本語音声学入門
 著者名：斎藤純男
 出版社：三省堂

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	音声学				
担当者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

音声学・音韻論・言語学・音響学の知識を統合し、ことばについての理解を深めます。

■ 到達目標

1年生の時に勉強した音声学・音韻論・言語学・音響学の知識を統合し、言語障害・構音障害・聴覚障害を理解するための基礎的知識の完成を目指します。

■ 授業計画

- 第1回 記号としてのことばの復習
- 第2回 音声学の復習：発音記号の注意点
- 第3回 音声学の復習：発声および調音位置について
- 第4回 音声学の復習：調音方法について
- 第5回 音響学の復習：音源フィルタ理論と共鳴
- 第6回 母音の調音と音響学
- 第7回 接近音の調音と音響学
- 第8回 歯擦音の調音と音響学
- 第9回 ハ行子音の調音と音響学
- 第10回 破裂音の発声と音響学
- 第11回 破裂音の調音位置と音響学
- 第12回 日本語の無声化と音響学
- 第13回 撥音・促音・長音・モーラ・音節と音響学
- 第14回 アクセントとイントネーションの復習
- 第15回 日本語の音調と音響学
- 第16回 音声知覚様式：連続的知覚・範疇的知覚・聴覚バッファ
- 第17回 音声学と音韻論
- 第18回 文字・語種に関する復習
- 第19回 形態素に関する復習
- 第20回 日本語の合成語に関する復習
- 第21回 動詞後続形態素とその意味
- 第22回 日本語における語用論の基礎
- 第23回 社会言語学の基礎
- 第24回 日本語音声学・日本語言語学の全体像
- 第25回 国家試験問題の解説：音声学（1）分節音
- 第26回 国家試験問題の解説：音声学（2）超分節音
- 第27回 国家試験問題の解説：言語学（1）形態論
- 第28回 国家試験問題の解説：言語学（2）意味論・語用論
- 第29回 国家試験問題の解説：音響学
- 第30回 音声学・言語学・音響学のまとめ

■ 評価方法

学期末のテストによって成績評価を行います。マークシート方式での評価が100%となります。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は2時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1時間程度。また、初回の授業までに、1年生で学んだ「言語学」「構音障害」の内容をよく復習しておいてください。

■ 教科書

書 名：昨年度購入の教科書を用います（言語聴覚士のための基礎知識「音声学・言語学」第2版）

■ 参考図書

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	音響学Ⅰ				
担当者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

音の周波数・強さと音圧という物理的性質について詳細な解説を行います。

■ 到達目標

波数・波長の計算、dB の計算方法とその意味することに精通し、聴覚障害および補聴器や人工内耳の物理学的性質を正しく説明できる能力の涵養を目指します。

■ 授業計画

- 第1回 音とは何か
- 第2回 振動の伝播と原波形表示
- 第3回 音の4要素
- 第4回 疎密波の大局的な振動スピード
- 第5回 周波数・周期・波長
- 第6回 周波数と周波数レベル
- 第7回 ドップラー効果について
- 第8回 音の強さと音圧
- 第9回 レベルという概念の重要性
- 第10回 パワーレベル B 値の定義
- 第11回 B, dB の計算方法
- 第12回 強さレベルと音圧レベル
- 第13回 聴力レベルの考え方
- 第14回 感覚レベルと音の大きさの心理量
- 第15回 レベル概念と精神物理学的関数（Weber-Fechner の法則）

■ 評価方法

学期末のテストによって成績評価を行います。筆記試験での評価が100%となります。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は90分程度が必要です。また、復習時間は個人の理解度によりますが、1時間程度必要になるでしょう。

■ 教科書

書 名：プリントと web 教材を用います

■ 参考図書

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	音響学Ⅱ				
担当者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

音声の音響的特徴について詳細な解説を行います。

■ 到達目標

日本語音声のフォルマントをはじめとした音響特性について正しく理解し、構音障害の客観的な分析能力や、補聴器・人工内耳の設定に必要な基礎的知識の涵養を目指します。

■ 授業計画

- 第1回 音の持続時間と心理的影響について
- 第2回 純音と複合音
- 第3回 音のスペクトル
- 第4回 スペクトル包絡線と音色の関係
- 第5回 共鳴
- 第6回 音響音声学：声帯振動の特徴
- 第7回 音響音声学：調音と共鳴
- 第8回 閉管の音響特性
- 第9回 開管の音響特性
- 第10回 日本語5母音のフォルマント
- 第11回 接近音の音響特性：フォルマントローカスとフォルマント遷移
- 第12回 摩擦音の特徴
- 第13回 有声性と Voice Onset Time
- 第14回 破裂音の音響特性
- 第15回 聴覚心理とデジタル信号処理

■ 評価方法

学期末のテストによって成績評価を行います。筆記試験での評価が100%となります。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は90分程度が必要です。また、復習時間は個人の理解度によりますが、1時間程度必要になるでしょう。

■ 教科書

書 名：プリントと web 教材を用います

■ 参考図書

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語発達学				
担当者	川畑武義				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ・ヒトはどのようにして、ことばを獲得していくのか。主な言語発達理論と、言語発達を支える基盤について学んだ上で、子どもがことばを話し始めるまでの道筋を理解していく。
- ・幼児期から学童期の各発達段階における語彙・構文・会話・読み書き能力を含む言語発達の様相について学ぶ。

■ 到達目標

- ・ことばが出るまでの成り立ちを理解し、説明できる。
- ・幼児期から学童期の言語発達の様相および言語獲得過程について基礎知識を習得する。

■ 授業計画

- 第1回 言語発達理論
- 第2回 言語発達を支える発達の基盤
- 第3回 前言語期の発達 (1)
- 第4回 前言語期の発達 (2)
- 第5回 象徴機能の発達
- 第6回 語彙の獲得
- 第7回 語彙獲得を説明する理論
- 第8回 まとめ、象徴機能の発達評価
- 第9回 幼児期の言語発達 語彙・構文の発達①
- 第10回 幼児期の言語発達 語彙・構文の発達②
- 第11回 幼児期の言語発達 語彙・構文の発達③
- 第12回 会話能力の発達
- 第13回 読み書きの発達
- 第14回 子どもの「見る」「聞く」の発達
- 第15回 まとめ 前言語期～読み書きの発達

■ 評価方法

筆記試験100%
 授業への取り組みも考慮する（理由のない欠席－4点、理由のない遅刻／早退－2点、居眠り－1点）。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義内にて適宜、各自で取り組んでもらう課題を出す予定です。講義内にグループでの活動を適宜行う予定である。

■ 教科書

書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版
 著者名：藤田郁代 監修
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留 意 事 項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	リハビリテーション概論				
担 当 者	大西環・福田信二郎・井上直哉・川畑武義・大根茂夫				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

リハビリテーションの概要についての講義と言語聴覚障害の方との対話会を行う。

■ 到達目標

リハビリテーションの考え方について知る。言語聴覚障害者とのコミュニケーションについて理解を深め、コミュニケーションに関する自己の課題を知る。言語聴覚障害の方との対話を通じて、リハビリテーションへの取り組みや生活の実際を知る。

■ 授業計画

- 第1回 リハビリテーションとは（大西）
リハビリテーションの考え方とその概要
- 第2回 対話会の実施にあたって（大西）
対話会の意義と取り組むべき課題について
- 第3回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会（対話）（ST 教員）
- 第4回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会（振り返り）（ST 教員）
- 第5回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会（レポート作成及びフィードバック）（ST 教員）
- 第6回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会（対話）（ST 教員）
- 第7回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会（振り返り）（ST 教員）
- 第8回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会（レポート作成及びフィードバック）（ST 教員）

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・グループで対話会の準備を行う。また、終了後は対話会のビデオを見ながらレポートを作成する。
- ・参加される方の時代背景（戦前・戦後、それ以降）について調べておくこと。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	社会保障制度				
担当者	山本永人				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

わが国の社会保障制度を、社会保険、公的扶助また障害者や児童福祉などの社会福祉サービスにわけて学習する。社会保障制度の基軸となる社会保険や、生存権保障の柱となる生活保護制度、また障害者総合支援制度の成り立ちや枠組みを、その仕組みの狙いや目的、または理念などを通じて学んでいく。

■ 到達目標

社会保障の基本的な概要を説明できる。
 社会福祉の成り立ちやその範囲、目的、理念を説明できる。
 対人援助職としての素養を身につける。
 現代的な貧困など、わが国の社会保障制度の課題や展望を述べることができる。

■ 授業計画

- 第1回 社会福祉と社会保障制度
- 第2回 社会保障とは
- 第3回 障害者福祉の基本的な理念
- 第4回 ICF を理解する
- 第5回 わが国の社会福祉の歩み (1)
- 第6回 わが国の社会福祉の歩み (2)
- 第7回 社会保険制度① 医療保険 (1)
- 第8回 社会保険制度① 医療保険 (2)
- 第9回 社会保険制度② 年金保険制度
- 第10回 社会保険制度③ 労働保険制度
- 第11回 社会保険制度④ 介護保険 (1)
- 第12回 社会保険制度④ 介護保険 (2)
- 第13回 障害者総合支援制度の概要
- 第14回 障害者福祉サービス
- 第15回 児童家庭福祉サービス

■ 評価方法

科目試験（筆記試験）100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習について 授業に該当する部分の教科書を精読しておくこと
 復習について 配布されたプリントの赤字の部分は今一度、教科書等で確認すること

■ 教科書

書 名：系統看護学講座 専門基礎分野 「社会保障・社会福祉」 健康支援と社会保障制度 3
 著者名：福田 素生他
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

国家試験対策を念頭に授業を行います。積極的な参加をお願いします。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	医療福祉教育・関係法規				
担 当 者	山本 永人・吉見剛二・藤井達也・水田秀子				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ・①公的扶助制度を中心に、社会保障や社会福祉に関連する諸制度や法規について解説する。②障害者基本法や障害者差別解消法、成年後見制度など、社会福祉に重要な役割をもつ法規や制度について学ぶ。(山本)
- ・①大阪での聴覚障害者（重度重複、高齢聴覚障害者等）専門施設の実態や実践内容を学ぶ。②聴覚障害から生じる二次的障害および生活上の困難さを知る。③「願いを受け止め、寄り添う」大切さを知る。④個々のコミュニケーション能力や手段に対応できる多様なコミュニケーション手段・ツールを学ぶ。(吉見)
- ・言語聴覚士に関する法規、言語聴覚士法の成り立ちに関する講義を行う。(藤井)
- ・臨床に出るにあたり、ST として必要な心構えについて学ぶ。(水田)

■ 到達目標

- ・①社会保障の基本的な概要を説明できる。②社会福祉の成り立ちやその範囲、目的、理念を説明できる。③対人援助職としての素養を身につける。④現代的な貧困など、わが国の社会保障制度の課題や展望を述べるができる。(山本)
- ・単なる医学的立場での機能回復訓練に重点を置くことなく、クライアントの「生き甲斐と暮らし、人生を支える専門家になるための姿勢を身に付ける。(吉見)
- ・言語聴覚士法や関連法規の知識を身につける。言語聴覚士の社会的立場について説明できる。(藤井)
- ・臨床場面において ST として必要な心構えをもつことができる。(水田)

■ 授業計画

- 第1回 わが国の公的扶助制度①（山本）
- 第2回 わが国の公的扶助制度②（山本）
- 第3回 福祉に関連する法規や制度（山本）
- 第4回 成年後見制度と障害者差別解消法（山本）
- 第5回 大阪での聴覚障害者の専門施設づくりの歴史（親・関係者の願い、施設建設運動等）と理念を重視した実践の報告、多様な支援・実践を通じて、対象者が成長・発達していく姿・事例を紹介。
手話を使いながらの講義：利用者の実態・実践現場の実態など専門施設の紹介（吉見）
- 第6回 大阪での聴覚障害者の専門施設づくりの歴史（親・関係者の願い、施設建設運動等）と理念を重視した実践の報告、多様な支援・実践を通じて、対象者が成長・発達していく姿・事例を紹介。
手話を使いながらの講義：利用者の願いと豊かな支援・変化、コミュニケーション手段（吉見）
- 第7回 言語聴覚士法の歴史 職能組織について（藤井）
- 第8回 ST にとって必要なこと 臨床に出るにあたって（水田）

■ 評価方法

科目試験（筆記試験）100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- 予習について 授業に該当する部分の教科書を精読しておくこと（山本）
- 復習について 配布されたプリントの赤字の部分は今一度、教科書等で確認すること（山本）
- 配布されたプリント等をもとに授業内容について復習を行うこと（吉見・藤井）

■ 教科書

書 名：系統看護学講座 専門基礎分野 社会保障・社会福祉 健康支援と社会保障制度 3
著者名：福田 素生他
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

国家試験対策を念頭に授業を行います。また、社会保障制度を補完する内容を重視します。

積極的な参加をお願いします。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語聴覚障害学概論				
担 当 者	森田婦美子・大根茂夫・PT 教員・ST 教員				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ・神経系や発声発語器官、頭頸部解剖及び人体のしくみについての導入
- ・言語聴覚療法の各領域の臨床について現任者が講義を行う
- ・I 期実習ガイダンス

■ 到達目標

- ・神経系や発声発語器官、頭頸部及び人体のしくみについての概要を理解する
- ・様々な臨床現場における言語聴覚療法の臨床を知る
- ・実習に先立ち、言語聴覚士として必要な各領域の知識や技術の基礎的事項を身につける

■ 授業計画

- 第1回 神経系や発声発語器官、頭頸部解剖（大根）
- 第2回 人体機能の仕組み：心臓（森田）
- 第3回 人体機能の仕組み：腎臓（森田）
- 第4回 人体機能の仕組み：肝臓（森田）
- 第5回 人体機能の仕組み：脾臓（森田）
- 第6回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る（成人領域）（ST 教員）
- 第7回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る（小児領域）（ST 教員）
- 第8回 言語聴覚士の現場の声をきく会から学んだこと 発表（ST 教員）
- 第9回 I 期実習ガイダンス 車椅子操作 講義及び演習（PT 教員）
- 第10回 I 期実習ガイダンス トランスファー 講義及び演習（PT 教員）
- 第11回 I 期実習ガイダンス トランスファーと車椅子操作の注意点 講義及び演習（PT 教員）
- 第12回 I 期実習ガイダンス バイタルサインのみかたと注意点（森田）
- 第13回 I 期実習ガイダンス バイタルサインのみかた 講義及び演習（森田）
- 第14回 I 期実習ガイダンス 感染症について（森田）
- 第15回 I 期実習ガイダンス 感染症における注意点（森田）

■ 評価方法

小テスト100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループでの課題を課す。積極的に参加すること。

■ 教科書

書 名：図解 言語聴覚療法技術ガイド
 著者名：深浦順一 編集主幹
 出版社：文光堂

書 名：言語聴覚士テキスト
 著者名：廣瀬肇 監修
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

臨床実習Ⅰシラバスも参照すること。ST 専任教員による補習数コマあり。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語聴覚障害診断学				
担 当 者	森田婦美子・森田秋子他				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえ、障害レベルに応じた評価を行い、適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。運動障害性発話障害の原因と、それに応じた発声発語器官の形態、機能の検査、発話の検査による評価と訓練、および発話補助手段について述べる。(講師非公表)
- ②喉頭摘出後の代用音声について学ぶ。(森田秋子)

■ 到達目標

- ①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえて発声発語器官の形態、機能の検査、発話の検査による評価ができるようになる。(講師非公表)
- ②代用音声の導入について理解を深める。(森田秋子)

■ 授業計画

- 第1回 導入：運動障害性発話障害の障害レベルと評価について(講師非公表)
- 第2回 発話の検査(標準ディサースリア検査、発話明瞭度検査)(講師非公表)
- 第3回 呼吸機能、発声機能の評価(講師非公表)
- 第4回 鼻咽腔閉鎖機能の評価(講師非公表)
- 第5回 口腔構音機能の評価(運動範囲)(講師非公表)
- 第6回 口腔構音機能の評価(運動速度)(講師非公表)
- 第7回 口腔構音機能の評価(筋力)(講師非公表)
- 第8回 機器を用いた検査、反射検査など(講師非公表)
- 第9回 VTRによる症例呈示と検査の実施(講師非公表)
- 第10回 VTRによる症例呈示と検査の要約(講師非公表)
- 第11回 評価結果のまとめと所見作成(講師非公表)
- 第12回 評価結果の分析と考察(講師非公表)
- 第13回 喉頭摘出後の代用音声(森田秋子)
- 第14回 喉頭摘出後の代用音声 当事者の方からのお話(森田秋子)
- 第15回 II期実習ガイダンス カルテのみかた(森田婦美子)

■ 評価方法

成績は、定期試験における科目試験(筆記試験) 100%の結果にて評価する。

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

予め授業前にテキスト(標準ディサースリア検査)の準備物と評価手順と基準の箇所について、読んで準備してきてください。授業後に配布資料とテキストを読んで実際に検査手技を行って復習しておいてください。事前に検査で使用する物品の作成など準備が必要です(予習、準備 1.0時間)。講義終了後に検査手順を確認する(復習1.0時間)。

■ 教科書

書 名：標準ディサースリア検査 新装版
 著者名：西尾正輝
 出版社：インテルナ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

- ・臨床実習Ⅱのシラバスも参照すること
 - ・検査手技の演習を2人ペアになって行うので、予めペアを組む人を確認しておくこと。また、感染対策のため窓を開け換気を励行するとともに、予め各自フェイスシールドの用意をしておいてください。
- 新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語聴覚障害特論				
担 当 者	山本一郎・名徳倫明・江頭智香子・五味田裕・澤井里香子・中村美紀・森田秋子・ST 教員 他				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ・運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえ、ディサースリアの障害レベルに応じた適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。ディサースリア検査の評価データから総合的な分析を適切に行い、計画立案の考え方について述べる。(講師非公表)
- ・口腔の果たす2大機能である食べるということ、話すことについてその発生と発達について学ぶ。(山本)
- ・言語聴覚領域を行うに当たって知っておくべき薬の知識について学ぶ。(名徳・五味田)
- ・虐待問題について講義を行う。(江頭)
- ・認知症及びパーキンソン病の基礎知識について学ぶ。(澤井)
- ・①口腔健康管理の基礎知識について学修する。また、対象者に応じた口腔健康管理と、その手段のひとつである口腔ケアの重要性について理解を深める。②基礎的な口腔健康管理と、発達、および障害に応じた口腔健康管理について講義する。併せて、基本的な口腔ケアの方法や技術を講義する。(中村)
- ・社会復帰とその支援について学ぶ。(森田)
- ・国家試験を想定し、領域別問題に取り組む。(ST 教員)

■ 到達目標

- ・ディサースリア検査の評価データからディサースリアの障害レベルに応じて、総合的な分析を適切に行い、計画立案ができるようにする。
- ・発生と発達の視点から口腔機能を学び、様々な病態に対処できる知識を養う。(山本)
- ・薬物治療で言語聴覚領域に影響する薬について把握する。(名徳・五味田)
- ・虐待について理解を深める。(江頭)
- ・認知症及びパーキンソン病の患者様と接する時に必要な基本的知識を理解する。(澤井)
- ・①口腔健康管理の基礎知識について述べることができる。②対象者に応じた口腔健康管理について述べるができる。③基本的な口腔ケアの手法を述べるができる。④口腔ケアの重要性を述べることができる。(中村)
- ・社会復帰とその支援について理解を深める。(森田秋子)
- ・国家試験の受験にあたって受験対策を立て、実践できるようになる。(ST 教員)

■ 授業計画

- 第1回 総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した訓練について（講師非公表）
- 第2回 呼吸機能の治療アプローチ（講師非公表）
- 第3回 発声機能の治療アプローチ（講師非公表）
- 第4回 鼻咽腔閉鎖機能の治療アプローチ（講師非公表）
- 第5回 口腔構音機能の治療アプローチ（講師非公表）
- 第6回 発話速度の調節法1（講師非公表）
- 第7回 発話速度の調節法2と構音訓練など（講師非公表）
- 第8回 まとめ（講師非公表）
- 第9回 顔面・口腔の発生 口腔機能の発達（山本）
- 第10回 唇顎口蓋裂児における哺乳・摂食障害とその対処法（山本）
- 第11回 唇顎口蓋裂児者における異常構音の分析と治療について
エレクトロパラトグラフィー（EPG）を用いた異常構音の分析と治療について（山本）
- 第12回 薬の基礎知識①用法・用量など（名徳）
- 第13回 薬の基礎知識②副作用・相互作用など（名徳）
- 第14回 薬の薬理作用（摂食・嚥下に影響する薬剤）（名徳）

- 第15回 輸液の基礎と栄養（名徳）
- 第16回 薬物治療の基礎（用法・用量・副作用・相互作用、患者ケア 等）（五味田）
- 第17回 言語聴覚領域（特に聴覚・嗅覚、摂食・嚥下機能等）に影響する薬（五味田）
- 第18回 言語聴覚機能に影響する薬についての Q & A（五味田）
- 第19回 子供の虐待 歴史、制度の変遷、虐待の種類（江頭）
- 第20回 虐待に関わる発達の課題（被虐待児の心理的特徴等）（江頭）
- 第21回 虐待を取り巻く社会的背景（江頭）
- 第22回 虐待に対しての対応 被虐待児の支援について（江頭）
- 第23回 口腔健康管理の基礎知識（中村）
- 第24回 口腔ケアの基礎知識（中村）
- 第25回 社会復帰とその支援について
社会復帰を考えるうえで必要なこと職業復帰支援の実際～当事者の方からのお話（森田秋子）
- 第26回 社会復帰とその支援について
社会復帰を考えるうえで必要なこと職業復帰支援の実際～言語聴覚士からのお話（森田秋子）
- 第27回 脳神経内科疾患の理解：パーキンソン病（澤井）
- 第28回 脳神経内科疾患の理解：認知症（澤井）
- 第29回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（ST 教員）
領域別問題の実践 専門基礎領域
- 第30回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（ST 教員）
領域別問題の実践 専門領域

■ 評価方法

第1回～8回で筆記試験90%、9～28回でレポート10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・授業前に事前に訓練手技について予め読んで準備物を準備してきてください。テキストを目を通しておくこと（予習1.0時間）。授業後に配布資料とテキストのそれぞれの治療アプローチ、訓練手技についての箇所を読み直して、実際に友人を対象に実施し、講義で行った実習の復習を行うこと（復習1.0時間）。
- ・事前に指定した資料等を読み、予習しておく。授業後は、授業内容の整理と振り返りを行い、指示した課題に取り組む。

■ 教科書

書 名：ディサースリア臨床標準テキスト 第2版
著者名：西尾正輝
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：ディサースリア臨床標準テキスト 第2版 完全対応ワークブック
著者名：西尾正輝
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

訓練手技の演習を2人ペアになって行うので、予めペアを組む人を確認しておくこと。また、感染対策のため窓を開け換気を励行するとともに、予め各自フェイスシールドの用意をしておいてください。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	失語症Ⅰ（基礎）				
担当者	大西 環				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

失語症の言語治療を行う上で基礎となる知識について講義を行う。

■ 到達目標

失語症と他の言語障害の違いについて説明できるようになる。

失語症状とタイプ分類について理解し、臨床の観察点とすることが出来る。

■ 授業計画

- 第1回 失語症とは 定義と障害の特徴、臨床の流れ
- 第2回 言語モデルについて
- 第3回 失語症の言語症状 流暢性と非流暢性、症状の観察
- 第4回 失語症の言語症状 発話障害 発語失行、喚語障害、錯語
- 第5回 失語症の言語症状 発話障害 新造語、ジャーゴン ほか
- 第6回 失語症の言語症状 聴覚的理解障害
- 第7回 失語症の言語症状 読み書きの障害
- 第8回 失語症のタイプ分類 プロローカ失語、ウェルニッケ失語
- 第9回 失語症のタイプ分類 伝導失語、健忘失語、全失語
- 第10回 失語症のタイプ分類 超皮質性失語
- 第11回 その他の失語症と小児の失語症
- 第12回 純粋失読、純粋失書、失読失書
- 第13回 症状の観察
- 第14回 症状の観察と記録
- 第15回 まとめと復習

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義後、必ず復習を行って次回の講義に臨むこと。専門用語は、その意味を説明できるようになることを目標に復習してください。

■ 教科書

書 名：脳卒中後のコミュニケーション障害
 著者名：竹内愛子 河内十郎 編集
 出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	失語症Ⅱ（評価）				
担当者	井上直哉				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

失語症の治療・訓練・指導に必要な各種失語症検査法の概略を学ぶ。
検査から評価の方法、結果の解釈の方法、訓練法の立案を学ぶ。
各種失語症検査を標準的な実施方法で実施できるように演習を行う。

■ 到達目標

各種失語症検査の概要を知る。
各種失語症検査および関連検査を標準的な方法で実施できる。
検査結果から、結果の解釈、問題点の抽出、訓練の立案ができる。
評価報告書が書ける。

■ 授業計画

- 第1回 急性期・回復期・維持期の失語症患者の容態、医学的情報の収集の仕方、面接の仕方
- 第2回 スクリーニング検査の意義と実施方法
- 第3回 標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、検査の解釈の仕方、言語治療に活かす見方（1）
- 第4回 標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、検査の解釈の仕方、言語治療に活かす見方（2）
- 第5回 WAB 失語症検査の概略
- 第6回 重度失語症検査の概略
- 第7回 標準失語症検査補助検査（SLTA-ST）の概略
- 第8回 失語症語彙検査（TLPA）、SALA 失語症検査の概略
- 第9回 実用コミュニケーション能力検査（CADL）の概略
- 第10回 失語症構文検査（STA）、トークンテストの概略
- 第11回 語音弁別検査、モーラ分解・抽出検査の概略
- 第12回 鑑別診断、経過と予後、訓練・援助の方針の決定
- 第13回 評価報告書の書き方
- 第14回 症例演習（1）
- 第15回 症例演習（2）

■ 評価方法

筆記試験（100点満点）と、実技試験（100点満点）を行う。
筆記試験、実技試験とも60点以上を合格とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

失語症Ⅰ（基礎）で学んだ専門用語を理解しておくこと。授業で実施した内容及び配布した資料を繰り返し復習のうえ次回の授業に臨み、教科書の該当箇所にも目を通しておくこと。
授業で各種検査法の手技の説明を受けた後、学生同士でペアを作り、お互いに検査者、被験者になり検査練習を行うこと。ペアを変え、3例以上の検査練習を行うこと。検査練習は空き時間を有効に使うこと。
全ての検査マニュアルを熟読し暗記すること。

■ 教科書

書 名：標準失語症検査マニュアル 改定第2版
著者名：日本高次脳機能障害学会（旧 日本失語症学会）
出版社：新興医学出版社

書 名：脳卒中後のコミュニケーション障害 改定第2版
著者名：竹内愛子・河内十郎
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

書 名：なるほど！失語症の評価と治療－検査結果の解釈から訓練法・立案まで－
著者名：大塚裕一／宮本恵美
出版社：金原出版

■ 留意事項

必要に応じて各種失語症検査の実施方法を習得するための補講を行います。
本授業は臨床実習前ガイダンスと密接に連携しています。
失語症Ⅲ（訓練）、失語症Ⅳ（臨床講義）につながるようしっかりと取り組んでください。
不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	失語症Ⅲ（訓練）				
担当者	橋谷 玲子				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

失語症の障害構造を理解し、症例ごとの生活背景を考慮し、その訓練方法とケースごとの対処方法を学習します。

■ 到達目標

ケースを観察し、生活背景の情報収集を行い、コミュニケーション方法、訓練方法、その他臨床に必要なことを立案できるようになることを目指します。

■ 授業計画

- 第1回 失語症の臨床 コミュニケーションについて ST の役割
- 第2回 コミュニケーション方法と目標の設定 カルテから読み取る
- 第3回 ブローカ失語 音声を聞き評価する
- 第4回 ブローカ失語 合併する高次脳機能障害を検討
- 第5回 ブローカ失語 訓練を考える
- 第6回 ウェルニッケ失語 音声を聞き評価する
- 第7回 ウェルニッケ失語 合併する高次脳機能障害を検討
- 第8回 ウェルニッケ失語 訓練を考える
- 第9回 非定型失語 音声を聞き評価する
- 第10回 非定型失語 訓練を考える
- 第11回 側性化が異常なケース 症例を検討
- 第12回 側性化が異常なケース 訓練を考える
- 第13回 再帰発話 コミュニケーションについて
- 第14回 進行性失語 コミュニケーションについて
- 第15回 チーム医療

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義ごとに授業の内容を配布資料をもとに復習しておくこと。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	失語症Ⅳ（臨床講義）				
担当者	井上直哉・大西環・大根茂夫				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

① 失語症者の機能障害・能力障害・社会参加、QOL について考え、支援のポイントを学ぶ。② 失語症者に対し、スクリーニング検査、総合的失語症検査、掘り下げ検査を実施し、評価、訓練プログラムの立案、訓練までを行い、グループで報告書を作成し発表する。適宜次の内容を指導する。（失語症回復の理論と介入の実際、回復時期に合わせた援助、ゴール設定とプログラム立案、訓練の実施、評価報告書の作成）

■ 到達目標

各種失語症検査が標準的な実施方法で実施できる。
 検査結果から評価（結果の解釈、問題点の抽出）ができる。
 問題点に対し具体的な訓練法を立案できる。
 訓練に必要な教材を作成し、訓練を実施できる。
 評価報告書を作成し発表できる。

■ 授業計画

第1回	臨床講義1回目	セッションの準備
第2回	臨床講義1回目	失語症者に検査を実施する
第3回	臨床講義1回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第4回	臨床講義2回目	セッションの準備
第5回	臨床講義2回目	失語症者に検査を実施する
第6回	臨床講義2回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第7回	臨床講義3回目	セッションの準備
第8回	臨床講義3回目	失語症者に検査を実施する
第9回	臨床講義3回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第10回	臨床講義4回目	セッションの準備
第11回	臨床講義4回目	失語症者に検査又は訓練を実施する
第12回	臨床講義4回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出又は訓練プログラム）を作成 グループによる発表とフィードバック
第13回	臨床講義5回目	セッションの準備
第14回	臨床講義5回目	失語症者に検査又は訓練を実施する
第15回	臨床講義5回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出又は訓練プログラム）を作成 グループによる発表とフィードバック

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

基本的にはグループ活動であるので、各自が積極的に意見を出し合い、レポートにまとめること。他人任せにしない。

本授業は総合的な学習であるので、失語症Ⅰ～Ⅲで学習した内容が基礎となる。実際の患者様に検査を行い、評価・訓練を考えていくためには、基礎知識が重要であり、Ⅰ～Ⅲの復習とともに、さらに基礎知識を広げていくことが必要である。また、積極的に研究論文を読み込んでいく必要もある。

■ 教 科 書

書 名：脳卒中後のコミュニケーション障害 改定第2版

著者名：竹内愛子・河内十郎

出版社：協同医書出版社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

臨床実習Ⅲに繋がる講義です。しっかりと受講してください。活発なグループワーク・質問・討議を期待します。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	高次脳機能障害Ⅰ（概論）				
担 当 者	森岡悦子・中谷謙				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

本講義では、高次脳機能障害学の基本的知識を学ぶ。注意、記憶、認知、視空間認識、行為、遂行機能など脳の機能を理解し、それらの機能が損傷された結果生じる高次脳機能障害の臨床像と障害機序を学ぶ。

■ 到達目標

1. 脳の構造および領域別の機能を説明できる。
2. 各々の高次脳機能障害の臨床像を説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害の基本概念. 脳の構造、高次脳機能に関わる中枢神経系の情報処理システム（森岡）
- 第2回 注意障害：注意の機能と特性、注意障害の症状（森岡）
- 第3回 記憶障害：記憶の分類、記憶の回路とメカニズム、記憶障害の病巣別症状（森岡）
- 第4回 失行と関連症状 行為・動作、行動の障害（中谷）
- 第5回 失認と関連症状（森岡）
- 第6回 無視症候群 外界と身体処理に関わる空間性障害（中谷）
- 第7回 遂行機能障害 遂行機能を支える要因、前頭前野の機能、遂行機能障害の症状（森岡）
- 第8回 外傷性脳損傷による高次脳機能障害（森岡）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業までに、教科書の該当箇所を読み予習しておいてください。授業後は、授業で示された重要箇所を確認し、自分で説明できるように復習してください。

■ 教科書

書 名：高次脳機能障害学 第3版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学 第3版
 著者名：編集 阿部晶子, 吉村貴子
 出版社：医学書院

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ず質問をするようにしてください。
 不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	高次脳機能障害Ⅱ（評価）				
担当者	森岡悦子・中谷謙・圓越広嗣・酒井希代江				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

本講義では、高次脳機能障害の症状に関する知識を基に、高次脳機能障害の各検査の目的と実施方法、結果の解釈法を理解し、障害像の捉え方を学ぶ。また症状分析に必要な情報と合わせて考察し、高次脳機能障害の症状のまとめ方を修得する。

■ 到達目標

1. 高次脳機能検査の目的と実施方法を学び、正しく実施することができる。
2. 症状に応じて、必要な掘り下げ検査を選択し、実施することができる。
3. 検査結果を正しく解釈し、病変と症状を対応させて、障害像を捉えることができる。
4. 検査結果から高次脳機能障害の症状をまとめることができる。

■ 授業計画

- 第1回 認知機能（1）：認知機能、認知機能全般のスクリーニングの意義の理解（森岡）
- 第2回 認知機能（2）：言語性の認知機能のスクリーニング MMSE-J、HDS-R の目的、実施方法、結果解釈の理解（森岡）
- 第3回 認知機能（3）：視覚性の認知機能のスクリーニング RCPM の目的、実施方法、結果解釈の理解（森岡）
- 第4回 注意障害（1）：注意の特性と、注意機能障害の臨床像（森岡）
- 第5回 注意障害（2）：改訂版 標準注意検査法・標準意欲評価法の目的と手順の理解（森岡）
- 第6回 注意障害（3）：改訂版 標準注意検査法・標準意欲評価法の演習、結果の解釈、症状のまとめ（森岡）
- 第7回 記憶障害（1）：記憶障害の症状、病巣との関係（圓越）
- 第8回 記憶障害（2）：リバーミード行動記憶検査（RBMT）の目的と手順の理解（圓越）
- 第9回 記憶障害（3）：リバーミード行動記憶検査（RBMT）の演習、結果の解釈、症状のまとめ（圓越）
- 第10回 失行と失認（1）：失行と失認の障害機序と症状（酒井）
- 第11回 失行と失認（2）：失行の臨床像と、標準高次動作性検査（SPTA）の目的と手順の理解、結果の解釈、症状のまとめ（酒井）
- 第12回 失行と失認（3）：失認の臨床像と、標準高次視知覚検査（VPTA）の目的と手順の理解、結果の解釈、症状のまとめ（酒井）
- 第13回 視空間障害（1）：半側空間無視、構成障害、バリント症候群（中谷）
- 第14回 視空間障害（2）：BIT 行動性無視検査の目的と実施手順の理解（中谷）
- 第15回 視空間障害（3）：BIT 行動性無視検査の演習、結果の解釈、症状のまとめ（中谷）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

初回授業までに、1年生で学んだ「高次脳機能障害Ⅰ」の内容をよく復習しておいてください。
授業中に示された重要箇所をよく確認し復習してください。各検査については、検査手技を高めるため、空き時間を利用して自主的に練習を行ってください。

■ 教科書

書 名：高次脳機能障害学 第3版
著者名：石合純夫
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：神経心理検査ベーシック

著者名：武田克彦（編）

出版社：中外医学社

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ず質問をするようにしてください。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	高次脳機能障害Ⅲ（臨床）				
担 当 者	森岡悦子・中谷謙・圓越広嗣・酒井希代江				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

本講義では、医学的情報と高次脳機能評価で得られた結果を基に障害像をとらえ、障害機序に沿ったリハビリテーションプログラムを立案するための知識を修得する。

■ 到達目標

1. 医学的情報と検査結果から、高次脳機能障害の障害機序を論理的に考察することができる。
2. 障害機序に基づき、適切なリハビリテーションプログラムを立案することができる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害のリハビリテーション全般、注意機能のリハビリテーション（酒井）
- 第2回 記憶障害の評価（WMS-R）の構成と実施手順の理解、解釈と症状のまとめ（酒井）
- 第3回 記憶障害のリハビリテーション（森岡）
- 第4回 半側空間無視のリハビリテーション（中谷）
- 第5回 遂行機能の評価（BADS）の実施手順の理解（圓越）
- 第6回 遂行機能の評価（BADS）の演習、解釈、症状のまとめ（圓越）
- 第7回 遂行機能のリハビリテーション（中谷）
- 第8回 認知症の病型別初期症状、環境調整（森岡）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

初回授業までに、「高次脳機能障害Ⅰ」「高次脳機能障害Ⅱ」の内容をよく復習しておいてください。
授業中に示された重要箇所をよく確認し復習してください。

■ 教科書

書 名：高次脳機能障害学 第3版
著者名：石合純夫
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：よくわかる失語症のセラピーと認知リハビリテーション
著者名：鹿島晴雄、大東祥孝、種村純 編集
出版社：永井書店

書 名：高次脳機能障害ポケットマニュアル 第4版
著者名：原寛美 監修
出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：症例で学ぶ高次脳機能障害
著者名：鈴木匡子 編集
出版社：中外医学社

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ず質問をするようにしてください。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語発達障害Ⅰ（援助法—基礎）				
担当者	井上直哉・川畑武義				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

対人援助職として仕事を進めていく上で必要な観察の視点・方法とそれらを言語化・文字化してまとめ、実習日誌や報告書やカルテ等を通して伝えることを学ぶ。第1回～第8回までは、観察と記録の初歩的な事項と、主に成人領域のVTR等を活用した講義と演習を実施する。第9回～第15回までは、小児領域のVTR等を活用した講義と演習を実施する。

■ 到達目標

臨床実習Ⅰの日誌作成を念頭に、基本的な行動観察や記述の視点・方法を習得する。

■ 授業計画

第1回	成人の観察と記録	概要及び視点について（井上）
第2回	成人の観察と記録	概要及び視点について模擬症例を用いたワーク（井上）
第3回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR 1 個人ワーク（井上）
第4回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR 1 グループワーク（井上）
第5回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR 1 グループワーク発表と解説（井上）
第6回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR 2 グループワーク（井上）
第7回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR 2 グループワーク発表と解説（井上）
第8回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR 3 個人ワーク（井上）
第9回	小児領域における観察及び評価の視点（川畑）	
第10回	小児の観察と記録	概要及び視点について模擬症例を用いたワーク（川畑）
第11回	小児の観察と記録	小児 VTR 1 個人ワーク（川畑）
第12回	小児の観察と記録	小児 VTR 1 グループワーク（川畑）
第13回	小児の観察と記録	小児 VTR 2 個人ワーク（川畑）
第14回	小児の観察と記録	小児 VTR 2 グループワーク（川畑）
第15回	小児の観察と記録	小児 VTR 3 個人ワーク（川畑）

■ 評価方法

井上担当分と川畑担当分合わせて100%とする。

井上担当分は提出物100%で評価する。

川畑担当分は提出物100%で評価する。

提出物の遅れや不備などについては減点対象（1回：-10点）とする。

授業への取り組みも考慮する（理由のない欠席-4点、理由のない遅刻/早退-2点、居眠り-1点）。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

演習が多い講義内容となっています。講義内にて適宜、各自で取り組む課題を出す予定です。教科書の該当部分によく目を通しておくこと。

■ 教科書

書名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編

著者名：深浦順一・為数哲司・内山量史 編著

出版社：建帛社

書名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 小児編

著者名：深浦順一・内山千鶴子 編著

出版社：建帛社

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語発達障害Ⅱ（概論）				
担当者	吉田紀子・川畑武義				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

言語発達障害の基礎的な概念と各障害の特性を学ぶ。

■ 到達目標

言語発達障害の概念と特性を理解し、それぞれの言語発達障害について説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 小児の発達と言語発達障害概論（吉田）
- 第2回 知的障害（吉田）
- 第3回 自閉症スペクトラム障害①（吉田）
- 第4回 自閉症スペクトラム障害②（吉田）
- 第5回 注意欠陥多動性障害①（吉田）
- 第6回 注意欠陥多動性障害②・発達性協調運動障害（吉田）
- 第7回 限局性学習障害／発達性読み書き障害①（吉田）
- 第8回 限局性学習障害／発達性読み書き障害②（吉田）
- 第9回 特異的言語発達障害（吉田）
- 第10回 言語発達障害と地域での支援（吉田）
- 第11回 発達概念（川畑）
- 第12回 姿勢と粗大運動の基礎知識（川畑）
- 第13回 言語発達障害の医学的背景（川畑）
- 第14回 脳性麻痺（川畑）
- 第15回 重症心身障害児（川畑）

■ 評価方法

吉田担当、川畑担当を合わせて100％で評価する。

吉田の範囲は筆記試験100％。

川畑の範囲は筆記試験100％。

授業への取り組みも考慮する（理由のない欠席－4点、理由のない遅刻／早退－2点、居眠り－1点）。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

臨床の基本となる基礎知識を学びます。授業後に復習し、不明な点は質問するなどして理解を深めてください。

■ 教科書

書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害 第3版
 著者名：藤田郁代 監修
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 小児科学・発達障害学 第3版
 著者名：編集 宮尾益知 小沢浩
 出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語発達障害Ⅲ（評価法－基礎）				
担当者	大谷多加志・工藤芳幸・赤壁省吾				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ・対象者の発達状態を適切に理解することは、小児の言語治療を行う上で非常に重要なことである。本講では小児の発達評価に最もよく用いられる検査のひとつである新版 K 式発達検査2020の実施・評価を学習することを通して、小児の発達アセスメントにおける基礎的理解を深めていく（大谷）。
- ・LC スケール（言語・コミュニケーション発達スケール）を取り上げ、言語理解・言語表出・コミュニケーションの発達アセスメントの方法を学ぶ。また、検査結果を統合・解釈し、指導目標を設定するプロセスを習得する（工藤）。
- ・前半部分では、言語の発達に不安を感じる親子が訪れた際、言語聴覚士がどのように保護者を迎え、支援を始めるかについて紹介します。発達障害や知的障害がある子どもの特性理解の学びを通して、直接的な個別支援、または集団場面での社会性を重視した関わり方など、年齢や目的に応じて言語聴覚士の役割は大きく変わります。後半部分では、放課後等デイサービスや就労支援サービスなど、長期的な視点での支援の必要性に焦点を当てます。学齢期以降の介入は、読み書きや計算などの学習面への支援や、自己認知を促す特性理解の支援が重要です。これらは自立への道りとして、就労に向けたプロセス理解に繋がります。さまざまな支援方法についての理解を深め、コミュニケーション上の課題を切り口にして、より深い理解を目指します。（赤壁）。

■ 到達目標

- ・小児の発達アセスメントに関する基礎知識を身につける
- ・新版 K 式発達検査2020の概要と幼児期の検査項目の実施・評価の方法を理解する（大谷）。
- ・小児の言語・コミュニケーション発達に関する評価法および指導目標設定についての基礎知識の習得（工藤）。
- ・発達障害の特性やライフステージにおける変化を理解する。（赤壁）
- ・地域支援のあり方について知識を深める。（赤壁）
- ・障害福祉の障害児通所支援サービス・就労サービスを理解し説明できるようになる。（赤壁）

■ 授業計画

- 第1回 発達アセスメントの意義と留意点（大谷）
- 第2回 新版 K 式発達検査2020の概要（大谷）
- 第3回 検査の実施手順と評価 乳児（大谷）
- 第4回 検査の実施手順と評価 乳児～幼児（大谷）
- 第5回 検査の実施手順と評価 幼児①（大谷）
- 第6回 検査の実施手順と評価 幼児②（大谷）
- 第7回 検査の得点化、発達年齢・発達指数の算出（大谷）
- 第8回 検査結果にもとづく発達評価と助言、支援（大谷）
- 第9回 事例から考える発達評価・発達支援（大谷）
- 第10回 LC スケール（言語・コミュニケーション発達スケール）の概要（工藤）
- 第11回 LC スケールの実施手順と評価① 言語表出・言語理解領域（工藤）
- 第12回 LC スケールの実施手順と評価② コミュニケーション領域（工藤）
- 第13回 検査結果の統合と解釈および指導目標設定②（工藤）
- 第14回 発達障害の特性理解と関わりについて（赤壁）
- 第15回 障害福祉サービスでの言語聴覚士の働きについて（赤壁）

■ 評価方法

大谷担当、工藤担当、赤壁担当を合わせて100%で評価する。

- ・ 第1回～9回、大谷担当分は、授業後のショートレポートによって評価する。
- ・ 第10～13回、工藤担当分は、講義時間内に実施する提出課題により評価する。
- ・ 第14・15回、赤壁担当分は授業後のレポートにて評価をする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

必要に応じて講義中に指示をする。

■ 教科書

書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害 第3版

著者名：藤田郁代 監修

出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：言語・コミュニケーション発達の理解と支援 :LC スケールを活用したアプローチ

著者名：大伴潔、林安紀子、橋本創一

出版社：学苑社

書 名：新版 K 式発達検査2020実施手引書

出版社：京都国際社会福祉センター

書 名：小児リハビリテーション vol.14（特集）コミュニケーションの発達② 1歳からの言語の発達

著者名：学齢期の社会性とコミュニケーション言語の発達 赤壁省吾 分担

出版社：ともあ編集部

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語発達障害Ⅳ（評価法 - 各論）				
担当者	齋藤典昭・川畑武義			（オムニバス）	
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ・小児言語聴覚療法の評価には、言語発達の遅れの有無の判断、障害の同定と程度の判定、指導方法の選択まで多岐にわたる。子どもの全体的な臨床像を把握するためには、言語のみならずコミュニケーションを含めた発達全般、知能や認知能力、言語環境や保護者の思いなどの情報を収集することが大切である。この講義では、評価の目的を理解し、基本情報の収集と手順について学び、各検査の目的、対象年齢、検査の領域を理解する（川畑）。
- ・「言語検査」である「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」を学ぶ（齋藤）

■ 到達目標

1. 検査の概要を述べることができる（齋藤）
2. 検査を実施することができる（齋藤）
3. 検査サマリーを作成できる（齋藤）
4. 小児言語聴覚療法で使用する検査の概要について理解しする（川畑）
5. 発達特性に合わせて検査を選択することができる（川畑）

■ 授業計画

- 第1回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」検査用具に触れ、検査項目との関係を知る（齋藤）
- 第2回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」段階3-2の検査項目、DVD 教材視聴（齋藤）
- 第3回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」段階4-1、4-2、5-1、5-2の検査項目、記録用紙への転記（齋藤）
- 第4回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」段階2の検査項目、コミュニケーション態度の評価、DVD 教材視聴（齋藤）
- 第5回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」提出課題の説明、サマリー作成演習（齋藤）
- 第6回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」サマリー作成課題、関連検査の紹介（齋藤）
- 第7回 小児領域の評価の考え方（川畑）
- 第8回 発達検査について①（川畑）
- 第9回 発達検査について②（川畑）
- 第10回 知能検査について①（川畑）
- 第11回 知能検査について②（川畑）
- 第12回 学習・認知検査について①（川畑）
- 第13回 学習・認知検査について②（川畑）
- 第14回 言語検査について（川畑）
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

川畑担当・齋藤担当、合わせて100%で評価する。
 齋藤担当分については課題提出物100%で評価する。
 川畑担当は、筆記試験で評価する。また授業への取り組みを考慮する（理由のない欠席-4点、理由のない遅刻/早退-2点、居眠り-1点）。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・「言語発達障害学第2版」医学書院 p198-p216＜S-S法＞の部分をコピーして全員に配布する。（齋藤）
- ・新版K式発達検査2020の講義については、言語発達障害Ⅲ（評価法-基礎）の内容と検査マニュアルを復習し、実際の検査場面の記録と結果処理の仕方（採点や計算など）を確認しておいて下さい。演習を中心とした講義になります。（川畑）

■ 教科書

書名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害 第3版
著者名：藤田郁代 監修
出版社：医学書院

■ 参考図書

書名：新版K式発達検査2020実施手引書
出版社：京都国際社会福祉センター

書名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第2版
著者名：藤田郁代 監修
出版社：医学書院

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語発達障害Ⅴ（援助法－各論）				
担当者	加藤義弘・ネグロンちひろ・中山清司				オムニバス
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

言語コミュニケーション発達支援の介入技法について学ぶ。

- ・加藤（第1回～第5回）は、発達障害を中心に、それぞれの障害特性や園や学校生活で困ることへの理解、検査結果の活用や支援の方法について学ぶ。
- ・ネグロン（第6回～第11回）は、① ABA の概念を使って教えることの基礎を学ぶ、そしてコミュニケーションの種類や定義について応用行動分析の視点から考える。②拡大・代替コミュニケーションの指導方法としての PECS®の初期のフェーズの教え方の手続きの基本を学ぶ。
- ・中山（第12回～第15回）は TEACCH を背景として、ASD 児者のライフステージやコミュニケーション支援、地域生活支援などを講義する。

■ 到達目標

- ・加藤（第1回～第5回）は、発達の観点から見た障害の知識や支援に対する基本的な考え方が理解できる。障害特性に応じた評価方法、介入技法や訓練教材を立案できる。
- ・ネグロン（第6回～第11回）：基礎的な ABA の用語の理解、PECS®の手続きやエラー修正について実施できる。
- ・障害特性に適した評価方法や介入技法、訓練教材を立案できる。

■ 授業計画

- 第1回 発達支援の基本（支援の必要性、支援方法、発達段階に即した支援内容、保護者支援など）（加藤）
- 第2回 障害特性に応じた支援①（注意欠如多動症・自閉スペクトラム症・限局性学習症の SST）（加藤）
- 第3回 障害特性に応じた支援②（注意欠如多動症・自閉スペクトラム症・限局性学習症の LST）（加藤）
- 第4回 障害特性に応じた支援③（特異的言語発達障害の指導と支援）（加藤）
- 第5回 障害特性に応じた支援④（限局性学習症の指導と支援・ICT の活用）（加藤）
- 第6回 ABA の概念・コミュニケーションを教える活動下（ネグロン）
- 第7回 ABA の概念・コミュニケーションについての概念・種類（ネグロン）
- 第8回 ABA の概念・指導についての知識（ネグロン）
- 第9回 PECS® 絵カード交換式コミュニケーションシステム①（ネグロン）
- 第10回 PECS® 絵カード交換式コミュニケーションシステム②（ネグロン）
- 第11回 PECS®とその他のコミュニケーション指導（ネグロン）
- 第12回 自閉症・発達障害の特性理解に基づく支援の基本（中山）
- 第13回 自閉症・発達障害の人への地域生活支援に関する事例検討（中山）
- 第14回 自閉症のコミュニケーションプログラムの開発（中山）
- 第15回 自閉症のコミュニケーションプログラムに関する事例検討（中山）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各講義の前に言語発達障害Ⅱで学んだ発達障害の項目を復習しておくこと。また、言語発達障害のテキストにある応用行動分析、TEACCH の項目は一読しておくこと。

■ 教 科 書

中山担当分で使用

書 名：強度行動障害のある人の「暮らし」を支える

著者名：強度行動障害支援者養成研修〔基礎研修・実践研修〕テキスト

出版社：中央法規出版

■ 参 考 図 書

書 名：言語聴覚士のための言語発達障害学第2版

著者名：石田宏代 石坂郁代 編

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留 意 事 項

- ・第1回～第5回では事例検討を取り入れることがあります。（加藤）

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語発達障害Ⅵ（援助法一応用）				
担当者	松下真一郎・他			オムニバス	
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ・ AAC の実際について学ぶ（第1回～第7回）。
- ・ 脳性麻痺児の言語障害の特徴やコミュニケーションの問題点を学習する。また、ボバース概念による言語治療の考え方や評価の仕方を学ぶ。その上で、摂食指導を行っていく上での基本の技術を学習する（第8～11回）。
- ・ 乳幼児における視覚・聴覚・体性感覚の統合の重要性を踏まえ、身体運動の必要性を考察する。更にその問題構制を自閉症スペクトラムに敷衍して考察する（12回～15回）。

■ 到達目標

1. AAC の適用について判断できる（第1回～第7回）。
2. 脳性麻痺児の言語障害やコミュニケーションの問題、食事の問題点を知る。そして、それに対する援助方法を知り、理解する。また、実際に指導を行っていく際の食べさせ方、飲ませ方、咀嚼を促す方法などを習得する（第8回～第11回）。
3. 新たな視点から言語発達障害を捉え直し、その理解を拓ける（第12回～第15回）。

■ 授業計画

- 第1回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ AAC 概論（講師非公表）
- 第2回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 理論（講師非公表）
- 第3回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 演習（講師非公表）
- 第4回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 当事者に來ていただき演習（講師非公表）
- 第5回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 当事者に來ていただき演習（講師非公表）
- 第6回 日本版 PIC シンボルの概要、指導方法（講師非公表）
- 第7回 シンボルを使ったコミュニケーション指導の事例（講師非公表）
- 第8回 脳性麻痺児の言語障害概論（口腔機能の正常発達も含めて）（講師非公表）
- 第9回 脳性麻痺児のコミュニケーションの問題と援助（講師非公表）
- 第10回 ボバース概念による評価と治療（講師非公表）
- 第11回 摂食指導について（実技練習）（講師非公表）
- 第12回 乳幼児における視覚・聴覚・体性感覚の統合の重要性（松下）
- 第13回 乳幼児の視覚・聴覚・体性感覚の統合における身体運動の必要性（松下）
- 第14回 自閉症スペクトラムにおける視覚・聴覚・体性感覚の統合（松下）
- 第15回 自閉症スペクトラムにおける身体運動の必要性（松下）

■ 評価方法

- 第1回～第11回担当と第12回～15回松下担当を合わせて100%で評価する。
- 第1回～第11回担当分は筆記試験100%で評価する。
- 第12回～15回松下担当分は筆記試験100%で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・ 標準言語聴覚障害学 言語発達障害 第3版の拡大・代替コミュニケーション（AAC）に関する箇所を目を通しておくこと。
- ・ 脳性麻痺児・者に対する関わりについて知識を整理しておくこと

■ 教科書

書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害 第3版
著者名：藤田郁代 監修
出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：言語聴覚療法シリーズ12 改定言語発達障害Ⅲ
著者名：笠井 新一郎
出版社：建帛社

書 名：言語聴覚士のための AAC 入門
著者名：知念洋美
出版社：協同医書出版

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	言語発達障害Ⅶ（援助法・臨床）				
担当者	川畑武義・福田信二郎				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

ST と子どもが遊んでいるセッション場面を見て「子どもさんの課題」と、「ST のかわり方」について検討します。

■ 到達目標

1. 子どもの多様性を理解することができる
2. 子どもに合わせた遊びを考えることができる
3. 子どもの遊び場面から、子どもの能力を評価することができる

■ 授業計画

- 第1回 ガイダンス（川畑）
- 第2回 症例①の映像を見て記録を取る（検査場面）（川畑）
- 第3回 症例の所見作成（個人）（川畑）
- 第4回 症例の所見、訓練の立案（グループワーク）（川畑）
- 第5回 発表（川畑）
- 第6回 振り返り、フィードバック（川畑）
- 第7回 言語発達評価についての講義（川畑）
- 第8回 言語発達評価について（グループワーク）（川畑）
- 第9回 症例②の映像（検査場面）を見て記録を取る（個人）（川畑）
- 第10回 症例の所見、訓練の立案（グループワーク）（川畑）
- 第11回 発表（川畑）
- 第12回 振り返り、フィードバック（川畑）
- 第13回 各種検査の結果をもとに評価をまとめる（福田）
- 第14回 評価を基に支援を考える（グループ）（福田）
- 第15回 発表、フィードバック（福田）

■ 評価方法

川畑担当分、福田担当分合わせて筆記試験100%で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

演習が多い講義内容となっています。講義内にて適宜、各自で取り組む課題を出す予定です。
グループディスカッションを行い、レポートを作成・提出すること。

■ 教科書

書 名：明日からの臨床・実習に使える 言語聴覚障害診断 ー小児編
 著者名：大塚裕一、井崎基博
 出版社：医学と看護社

 書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 小児編
 著者名：深浦順一・内山千鶴子 編著
 出版社：建帛社

■ 参考図書

■ 留 意 事 項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	音声障害				
担当者	宮田 恵里				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

1. 喉頭の解剖および呼吸と発声の仕組みを学ぶ
2. 音声障害の診断と評価方法を学ぶ
3. 音声治療の適応および実際のアプローチ方法を学ぶ
4. 音声外科と薬物療法について学ぶ
5. 気管カニューレや気管切開患者への対応および無喉頭音声について学ぶ

■ 到達目標

喉頭の解剖および呼吸と発声について理解する。

患者の病態から音声障害が生じている原因について理論的に説明を行い、適切な評価方法および治療法の選択、音声治療のアプローチ方法を考察出来るようになる。

■ 授業計画

- 第1回 声の特性・喉頭の解剖
- 第2回 発声と呼吸の仕組み
- 第3回 音声障害の評価と診断 1
- 第4回 音声障害の評価と診断 2
- 第5回 音声障害疾患の分類 1
- 第6回 音声障害疾患の分類 2
- 第7回 音声治療の実際
- 第8回 間接訓練
- 第9回 症状対処的音声治療 1
- 第10回 症状対処的音声治療 2
- 第11回 包括的音声治療 1
- 第12回 包括的音声治療 2
- 第13回 音声外科と薬物療法
- 第14回 無喉頭音声・（気管切開患者への対応）
- 第15回 病態から考える音声治療

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎講義後にテキストおよびレジュメ、配布資料を用いて復習を行ってください。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法シリーズ14 改定 音声障害
 著者名：荻安誠 / 城本修 編集
 出版社：建帛社

書 名：声をみる いちばんやさしい音声治療実践ハンドブック
 著者名：宮田恵里 / 佐藤剛史 / 村上健
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：ST のための音声障害診療マニュアル

著者名：廣瀬 肇 監修

出版社：インテルナ出版

■ 留意事項

やむを得ず講義を欠席した場合は、欠席した講義のレジメを入手し、分からない箇所があれば質問して下さい。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	構音障害Ⅰ（臨床の基礎）				
担当者	藤原百合				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

正常な発話のメカニズムや発達を理解し、構音障害を来す原因や関連要因について学ぶ。主に機能性構音障害について、鑑別診断、評価方法、指導方法について学ぶ。また、実際の音声サンプルを用いて、評価・指導プログラムの立案の演習を行う。

■ 到達目標

- ・正常な発話のメカニズムを踏まえ、構音障害の概要について理解する。
- ・機能性構音障害に対する評価・指導を模擬的に実施できる。

■ 授業計画

- 第1回 正常な発話のメカニズム（呼吸、発声、共鳴、構音）
- 第2回 日本語音の種類（母音、子音）
- 第3回 日本語音の音声表記演習
- 第4回 話しことばの発達
- 第5回 発達途上で見られる音の誤り
- 第6回 特異な構音操作による誤り
- 第7回 発話が不明瞭な子供の診方
- 第8回 構音障害の原因、関連要因
- 第9回 構音検査法
- 第10回 構音評価（演習）
- 第11回 構音指導法
- 第12回 構音指導（演習）
- 第13回 事例によるグループ演習 1
- 第14回 事例によるグループ演習 2
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験 90% 小テスト 10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

前もって講義資料を配布しますので、教科書の該当箇所を予習、復習してください

■ 教科書

書 名：標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第3版
 著者名：藤田郁代監修 城本修 原由紀編集
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	構音障害Ⅱ（機能性）				
担当者	吉田紀子				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

機能性構音障害の指導に必要な基礎知識を学ぶ。
 構音の評価および結果の分析、指導のすすめかたについて学ぶ。

■ 到達目標

- ・ 構音発達の過程と機能性構音障害について理解する。
- ・ 構音を正確に聴き取り、記録することができる。
- ・ 構音障害の検査、結果の分析、構音指導を立案・実施することができる。

■ 授業計画

- 第1回 機能性構音障害とは
- 第2回 幼児期の構音発達
- 第3回 日本語の構音
- 第4回 構音の聴き取りと記録
- 第5回 機能性構音障害における構音の誤り①
- 第6回 機能性構音障害における構音の誤り②（異常構音）
- 第7回 構音の評価①
- 第8回 構音の評価②（構音検査演習）
- 第9回 評価結果の分析①
- 第10回 評価結果の分析②（演習）
- 第11回 構音の指導①
- 第12回 構音の指導②（演習）
- 第13回 ケーススタディー①
- 第14回 ケーススタディー②
- 第15回 ケーススタディー③

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

基礎知識から評価・指導まで幅広く学びます。授業後に復習し、不明な点は質問するなどして理解を深めてください。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法シリーズ7 改訂機能性構音障害
 著者名：本間 慎治
 出版社：建帛社

■ 参考図書

書 名：シリーズきこえとことばの発達と支援 特別支援教育における構音障害のある子どもの理解と支援
 著者名：加藤正子・竹下圭子・大友潔
 出版社：学苑社

■ 留 意 事 項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	構音障害Ⅲ（器質性）				
担当者	藤原百合				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

器質性構音障害（口蓋裂）について、基礎的知識、口蓋裂に伴う様々な問題や、チームアプローチについて学ぶ。鼻咽腔閉鎖機能検査や構音検査の実施、治療計画の立て方や構音訓練法について学ぶ。

■ 到達目標

- ・口蓋裂に伴う障害の概要を説明できる。
- ・鼻咽腔閉鎖機能や構音の評価方法を理解し、模擬的に実施できる。
- ・評価に基づいて治療計画を立案し、説明することができる。
- ・特異な構音障害に対する訓練方法を理解し、模擬的に実施できる。

■ 授業計画

- 第1回 器質性構音障害の定義・分類
- 第2回 口蓋裂に関する基礎的知識、関連障害
- 第3回 口蓋裂に伴う発話障害の特徴
- 第4回 発話の聴覚的評価（演習）
- 第5回 口腔顔面の形態・機能の評価
- 第6回 機器を用いた評価（鼻咽腔閉鎖機能、構音機能）
- 第7回 器質的異常に対する外科的、歯科補綴的治療
- 第8回 口蓋裂に対する言語治療：機能訓練
- 第9回 口蓋裂に対する言語治療：構音訓練
- 第10回 構音訓練（演習）
- 第11回 口蓋裂に伴うその他の問題（哺乳・離乳、発達、歯列・咬合、聴力、心理社会的問題）
- 第12回 チーム医療、経年的対応の変化
- 第13回 症例検討：年齢別の対応
- 第14回 症例検討：聴覚的評価から治療方針を考える
- 第15回 まとめ（国家試験過去問）

■ 評価方法

筆記試験 90% 演習 10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

前もって講義資料を配布しますので、教科書の該当箇所を予習、復習してください

■ 教科書

書 名：標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第3版
 著者名：藤田郁代監修 城本修 原由紀編集
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留 意 事 項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	構音障害Ⅳ（運動障害性）				
担当者	熊倉勇美				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

運動障害性構音障害だけでなく、口腔・中咽頭がん術後の構音障害についても学びます。急性期リハ、回復期リハ、維持期リハでの ST の果たす役割について、また医師・歯科医師との協業についても学びます。case study をたくさん提示します。器質性構音障害（口蓋裂）について、基礎的知識、口蓋裂に伴う様々な問題や、チームアプローチについて学ぶ。

■ 到達目標

dysarthria、器質性構音障害を理解し、分析と訓練のプラン、実施が出来るようにしましょう。

■ 授業計画

- 第1回 構音障害と ST 臨床の流れ、これまでの歴史を振り返って
- 第2回 dysarthria（運動障害性構音障害）とはどのようなものか？
- 第3回 臨床で出会う問題：失語症・発語失行などとの鑑別
- 第4回 原因疾患と dysarthria の原因疾患
- 第5回 原因疾患と dysarthria の発話症状
- 第6回 ST の果たす役割：観察・検査の実施と評価、分析
- 第7回 包括的検査と要素的検査：考え方
- 第8回 dysarthria のリハビリテーションの考え方
- 第9回 具体的な訓練の方法
- 第10回 具体的な訓練の方法とその実際
- 第11回 organic articulation disorders（器質性構音障害）とはどのようなものか？
- 第12回 口腔・中咽頭癌の原因、医学的治療、後遺するさまざまな問題
- 第13回 ST の果たす役割：観察・検査の実施（評価・分析）
- 第14回 ST の果たす役割：訓練・補綴治療①補綴歯科医との協業
- 第15回 ST の果たす役割：訓練・補綴治療②まとめ

■ 評価方法

筆記試験80%、小テスト20%：具体的に指示しますので、予習・確認をすること。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義は case study などを通じて、具体的・体験的に行います。確認したいことや疑問点などがあれば、積極的に質問などで発言して下さい。予習・復習に関しては、講義中に指示します。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	嚥下障害Ⅰ（基礎と評価）				
担当者	柴本 勇				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

本講義では、摂食嚥下に関わる口腔周囲および頭頸部の解剖、呼吸および神経制御を含む生理学的基盤を学び、嚥下障害を理解する。また、各疾患での病態や症状を理解する。その上で、病態や重症度を評価する方法について理解する。評価では演習にて具体的手技を修得する。

■ 到達目標

1. 正常嚥下に関わる構造を説明できる。
2. 正常嚥下に関する生理学的基盤を説明することができる。
3. 嚥下障害の原因・病態・症状を説明できる。
4. 嚥下障害の評価を説明し、結果を分析できる。
5. 評価を模擬的に実施できる。

■ 授業計画

- 第1回 摂食嚥下器官の解剖（教科書：P44～P67）
- 第2回 摂食嚥下の生理（教科書：P68～P83）
- 第3回 摂食嚥下と呼吸・発声（教科書：P92～P94）・嚥下のニューロサイエンス（教科書：P85～P89）
- 第4回 発達と摂食嚥下機能（教科書 P106～P112）・摂食嚥下の加齢変化（教科書 P113～119）
- 第5回 原疾患と嚥下障害の特徴①（教科書 P292～P311）※適宜症例紹介を行う可能性あり
- 第6回 原疾患と嚥下障害の特徴②（教科書 P312～P330）※適宜症例紹介を行う可能性あり
- 第7回 小児期の疾患と嚥下障害の特徴（教科書 P333～P353）
- 第8回 摂食嚥下障害の観察評価（P112～P124）
- 第9回 摂食嚥下障害のスクリーニング検査①（教科書：P126～P128）
- 第10回 摂食嚥下障害のスクリーニング検査②（教科書：P129～P133）
- 第11回 摂食嚥下障害のスクリーニング検査演習①
- 第12回 摂食嚥下障害のスクリーニング検査演習②
- 第13回 簡易型検査（教科書：P160～P168）
- 第14回 機器を用いた検査（教科書 P168～P177, P155～157）
- 第15回 重症度分類（教科書：P179～P181）※可能であれば演習も実施

■ 評価方法

小テスト20％，定期試験80％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内で小テストを実施し、理解度を確認しながら講義を進めます。演習を行いながら具体的手技を理解します。

一部反転授業を実施します。あらかじめ予習し授業で説明をします。

■ 教科書

書 名：摂食嚥下リハビリテーション 第3版

著者名：才藤栄一，植田耕一郎監修

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	嚥下障害Ⅲ（事例・臨床）				
担当者	田上恵美子・戸倉晶子・糸田昌隆				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

摂食嚥下リハビリテーションの取り組みの実際について学ぶ
成人・高齢者における摂食・嚥下障害の病態診断とリハビリテーションの具体的対応法、周辺事項への対応法

■ 到達目標

個々のケースについて評価し、訓練プランを立案できるようになる
病態別嚥下障害に関する臨床現場における具体的対応法の立案が可能になる

■ 授業計画

- 第1回 変性疾患の嚥下障害学概論（田上）
- 第2回 ALS 事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第3回 ALS 事例に対する意思伝達演習（空書・読唇・50音表・透明板・読み上げ法）（田上）
- 第4回 パーキンソン病事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第5回 多系統萎縮症・筋ジストロフィー・重症筋無力症などの事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第6回 ST 訪問訓練について、その実際と課題（田上）
- 第7回 訪問リハビリテーションにおける摂食嚥下リハビリテーションの実際
脳血管障害 軽度（症例呈示）（戸倉）
- 第8回 訪問リハビリテーションにおける摂食嚥下リハビリテーションの実際
脳血管障害 軽度（グループワーク、フィードバック）（戸倉）
- 第9回 訪問リハビリテーションにおける摂食嚥下リハビリテーションの実際
脳血管障害 重度（症例呈示）（戸倉）
- 第10回 訪問リハビリテーションにおける摂食嚥下リハビリテーションの実際
脳血管障害 重度（グループワーク、フィードバック）（戸倉）
- 第11回 訪問リハビリテーションにおける摂食嚥下リハビリテーションの実際
神経難病（症例呈示）（戸倉）
- 第12回 訪問リハビリテーションにおける摂食嚥下リハビリテーションの実際
神経難病（グループワーク、フィードバック）（戸倉）
- 第13回 成人・高齢者の正常嚥下の理解及び咀嚼の生理（糸田）
- 第14回 摂食嚥下障害への具体的対応法（糸田）
- 第15回 全身管理（サルコペニア・オーラルフレイル等）（糸田）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、質問等で疑問点の解決に努めること

■ 教科書

書 名：ケーススタディ摂食嚥下リハビリテーション in DVD ～50症例から学ぶ実践的アプローチ～
著者名：里宇明元，藤原俊之監修
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：事例でわかる摂食・嚥下リハビリテーション 現場力を高めるヒント
著者名：出江紳一，近藤健男，瀬田拓編集
出版社：中央法規

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する
場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方
法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	嚥下障害Ⅳ（チームアプローチ）				
担 当 者	大塚佳代子・永野彩乃・浦田ちひろ・森田婦美子・中村美紀・川畑武義 他				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ・チーム医療について学ぶ（川畑）
- ・摂食嚥下リハビリテーションに必要な知識と技術を演習を交えて学ぶ。気管切開患者の嚥下・発声発語障害の訓練法を学ぶ。（大塚）
- ・チームアプローチを行うにあたり多職種の業務内容を知り、連携内容について知る。（永野、浦田）
- ・①多職種連携における口腔健康管理の必要性について学修する。また、症例に応じた口腔ケアについて理解を深め、対象者に対する支援に備える。②多職種連携における口腔健康管理と、症例に応じた口腔ケアについて講義する。併せて、臨床の場で実践可能な口腔ケアについて講義し、対象者への支援に備える。（中村）
- ・吸引について学ぶ。（森田）
- ・リスク管理について学ぶ。（講師非公表）

■ 到達目標

- ・臨床上必要な知識を身に付け、手技を実践できるようになる。気管切開患者の嚥下障害と発声発語障害について理解し、訓練方法を学ぶ。（大塚）
- ・管理栄養士が行う業務内容と連携時に必要な知識を理解する。（浦田）
- ・①多職種連携における口腔健康管理について述べることができる。②症例に応じた口腔ケアについて述べることができる。③口腔ケアを通じた対象者支援について述べることができる。（中村）
- ・看護師が行う業務内容と連携時に必要な知識を理解する。（永野）
- ・吸引についての大枠を理解する。（森田）
- ・言語聴覚士に求められるリスク管理について理解する。（講師非公表）

■ 授業計画

- 第1回 嚥下障害の症例を通じた多職種連携（IPE）（川畑）
- 第2回 嚥下障害の症例を通じた多職種連携（IPE）演習（川畑）
- 第3回 気管切開患者の嚥下障害と発声発語器官障害（大塚）
- 第4回 気管切開患者の嚥下障害と発声発語訓練（大塚）
- 第5回 多職種連携における口腔健康管理（中村）
- 第6回 症例に応じた口腔ケア（中村）
- 第7回 栄養管理について（浦田）
- 第8回 嚥下食や治療食、食形態について（浦田）
- 第9回 ナースがSTに期待すること（永野）
- 第10回 チーム医療について（リハ栄養を例に）（永野）
- 第11回 吸引の技術と目的根拠の理解及び手順の理解（森田）
- 第12回 吸引の演習（森田）
- 第13回 吸引の演習とフィードバック（森田）
- 第14回 リスク管理（講師非公表）
- 第15回 リスク管理の実践（講師非公表）

■ 評価方法

レポート 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・事前に指定した資料等を読み、予習しておく。授業後は、授業内容の整理と振り返りを行い、指示した課題に取り組む。
- ・適宜授業中に指示する。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：発声発語障害学

著者名：藤田郁代

出版社：医学書院

書 名：摂食嚥下ビジュアルリハビリテーション

著者名：稲川利光

出版社：Gakken

■ 留意事項

演習の多い講義です。積極的に参加してください。

持ち物については別途連絡しますので、忘れないように持参してください。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	吃音				
担 当 者	土屋美智子				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

吃音・流暢性障害の基礎知識や臨床に必要な基本的技能について学習する。

■ 到達目標

吃音児・者のおかれている現状を知り、言語聴覚士としての援助のあり方を理解する。

「吃音とは何か」を理解し、情報収集（検査含む）、評価および指導・訓練など臨床に必要な基本的知識・技能を身につける。

吃音以外の流暢性障害について、基本的知識を身につける。

■ 授業計画

第1回 【吃音・流暢性障害の基本的知識】

第2回 【吃音症状】 吃音中核症状とその他の非流暢性などについて

【進展段階】 吃音の進展段階について理解する

第3回 【吃音児・者のおかれている現状】 吃音児・者のおかれている現状を知り、言語聴覚士としてどのように援助すべきかを考える

第4回 【吃音臨床①】 吃音臨床の流れ 情報収集

第5回 【吃音臨床②】 吃音検査法

第6回 【吃音臨床③】 吃音の総合評価について（症例検討）

第7回 【吃音臨床④】 吃音の指導・訓練法①

第8回 【吃音臨床⑤】 吃音の指導・訓練法② 再評価（症例検討）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前および授業中適宜指示する

■ 教科書

書 名：言語聴覚士ドリルプラス吃音・流暢性障害

著者名：土屋美智子

出版社：診断と治療社

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	聴覚障害Ⅰ（概論）				
担当者	矢吹裕栄・福田信二郎				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

聴覚障害学の基礎となる聴覚の器官の解剖と機能を理解し、難聴と聴覚検査との関係を学習する。（矢吹）
 聴覚障害が及ぼす影響を理解し、その援助法や補聴機器の概略について学習する。（福田）
 臨床でも最低限必要とされる基礎知識の習得を目指す。（福田）

■ 到達目標

聴こえの仕組みの基礎知識を習得する。（矢吹）
 難聴のタイプ分類と聴覚検査法の基礎を習得し、検査結果から難聴のタイプを推定できるようになる。（矢吹）
 聴覚障害への対応や各種補聴機器の仕組みを理解する。（福田）

■ 授業計画

- 第1回 基礎用語の確認
音とは何か、「きこえる」と言うこと。聴覚障害を学ぶにあたって最低限必要な知識を確認する（矢吹）
- 第2回 聴覚器の解剖
外耳・中耳の解剖と機能を確認する（矢吹）
- 第3回 聴覚器の解剖
内耳の解剖・機能を確認する（矢吹）
- 第4回 前半のまとめと復習（矢吹）
- 第5回 聴覚障害で見られる症状と問題点を考え確認する（矢吹）
- 第6回 難聴のタイプ分類を確認する（矢吹）
- 第7回 聴覚検査法1：主な聴覚検査の概要を確認する（純音聴力検査）（矢吹）
- 第8回 聴覚検査法2：主な聴覚検査の概要を確認する（純音聴力検査）（矢吹）
- 第9回 聴覚障害の実態 障害の疑似体験（福田）
- 第10回 聴覚障害を来す疾患（福田）
- 第11回 聴覚障害への対応（福田）
- 第12回 補聴器の仕組みと適応（福田）
- 第13回 人工内耳の仕組みと適応（福田）
- 第14回 聴力検査の復習と結果のみかた（福田）
- 第15回 まとめ（福田）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

学習内容が多くなるため、日々の復習が欠かせません。基本的事項の理解の積み重ねが重要な分野であり、基礎が疎かになるとその先の理解が難しくなります。その日のうちにその日の学習内容を復習する事が望ましいです。

■ 教科書

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版
 著者名：城間将江 鈴木恵子 小淵千絵
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：聴力検査の実際（改訂 4 版）

著者名：日本聴覚医学会 編

出版社：南山堂

■ 留意事項

1 年前期では講義に不慣れな事が多く、学習内容が多く欠席をするとその遅れを取り返すのが大変なことが多いです。無断欠席や遅刻に注意してください。基本的には学習内容は講義で使用するスライドに記載されています。講義はスライド中心で進行します。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	聴覚障害Ⅱ（聴覚検査法）				
担当者	矢吹裕栄・福田信二郎				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ・前期の学習内容から更に聴覚検査法の基礎を確認する。（矢吹）
- ・今まで学習した解剖・機能と検査等の基礎知識の関連を確認する。（矢吹）
- ・人工内耳の原理と機能、調整の基礎を確認し、装用者の実例を知る。（矢吹）
- ・標準純音聴力検査・語音聴力検査・インピーダンスオージオメトリー・自記オージオメトリー・SISI 検査・ABR 検査について、実際の聴覚検査機器を用いて手順と方法を学ぶ。（福田）
- ・幼小児の聴力検査について、聴覚検査機器などを用いて、ロールプレイしながら学ぶ。2 年の聴覚障害Ⅲの準備教育として、臨床における補聴器装用について学ぶ。（福田）

■ 到達目標

- ・聴覚器・疾患・検査結果の関連を整理する。（矢吹）
- ・人工内耳の仕組みを理解する。人工内耳装用者の実態を知る。（矢吹）
- ・検査機器の構成と検査の目的および手順について説明できる。（福田）
- ・幼小児の聴力検査について、種類と方法、適応年齢をいう事ができる。補聴器の構造と装用について概略を説明できる。（福田）

■ 授業計画

- 第1回 聴覚検査法1：主な聴覚検査の概要を確認する（語音聴力検査）（矢吹）
- 第2回 聴覚検査法2：主な聴覚検査の概要を確認する（他覚的聴力検査）（矢吹）
- 第3回 聴覚検査法3：主な聴覚検査の概要を確認する（その他の検査）（矢吹）
- 第4回 聴覚障害の評価と支援の概略を確認する（矢吹）
- 第5回 聴覚障害の実習の流れをケーススタディで確認する。（矢吹）
- 第6回 聴覚障害の原因となる疾患を復習する（矢吹）
- 第7回 聴覚器・疾患・検査結果の関連を確認する（グループワーク）（矢吹）
- 第8回 標準純音聴力検査について（福田）
- 第9回 標準純音聴力検査の検査演習（福田）
- 第10回 標準純音聴力検査の検査演習（福田）
- 第11回 インピーダンスオージオメーターについて（福田）
- 第12回 インピーダンスオージオメーターの検査演習（福田）
- 第13回 語音聴力検査について（福田）
- 第14回 語音聴力検査の検査演習（福田）
- 第15回 語音聴力検査の検査演習（福田）
- 第16回 Bekecy 検査について（福田）
- 第17回 Bekecy 検査の演習（福田）
- 第18回 Bekecy 検査の演習（福田）
- 第19回 閾値上検査について（演習含む）（福田）
- 第20回 聴性脳幹反応聴力検査（ABR）について（福田）
- 第21回 聴性脳幹反応聴力検査（ABR）の検査演習（福田）
- 第22回 聴覚検査結果の解説 検査目的と意義（福田）
- 第23回 聴覚検査結果の解釈（症例検討）（福田）
- 第24回 幼小児の聴力検査（新生児聴覚スクリーニング検査、BOA）（福田）
- 第25回 幼小児の聴力検査（VRA、COR、ピープショウ、遊戯聴力検査）（福田）
- 第26回 幼小児の聴力検査（ロールプレイ）
- 第27回 発達遅滞例の聴力評価（福田）

第28回 発達遅滞例の聴力評価（臨床の実際）（福田）
第29回 補聴器の構造と機能（福田）
第30回 まとめ（福田）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・前期の聴覚障害Ⅰの内容を踏まえて授業が進みます。聴覚障害Ⅰの内容での理解に不安のある場合は復習をしておく必要があります。（矢吹）
- ・各種聴覚検査の目的・適応・方法について理解すること。（福田）
- ・空き時間をみつけて、学生同士で互いに測定しあい、標準純音聴力検査およびティンパノメトリーのプローブ装着が適切にできるようになること。（福田）
- ・幼小児の聴覚検査の種類と適応年齢について覚えること。補聴器の基本的な構造と機能を説明できるようになること。（福田）

■ 教科書

書 名：聴力検査の実際
著者名：日本聴覚医学会 編
出版社：南山堂

■ 参考図書

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版
著者名：藤田 郁代
出版社：医学書院

■ 留意事項

- ・1年後期は前期に比べ日程が厳しく、欠席をするとその遅れを取り返すのが大変なことが多いです。無断欠席や遅刻に注意してください。（矢吹）
 - ・基本的には学習内容は講義で使用するスライドに記載されています。講義はスライド中心で進行します。（矢吹）
 - ・各種聴覚検査演習では、座学で理論を学び、その後に実際の検査機器を操作する演習を行います。（福田）
- 不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	聴覚障害Ⅲ（各論）				
担 当 者	野中信之・本庄良一・森貞吏加代・福田信二郎				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

1. 難聴乳幼児の耳の聞こえ方、言葉の獲得の困難、言語獲得教育における留意点、および支援のポイントについて学ぶ。2. 難聴乳幼児の発語の録音を聞いて、それをもとに、感音難聴の聴力と耳の聞こえ方の関連を体得する。3. 難聴乳幼児の言語獲得教育の実際をビデオ動画で体感・習得し、言葉を育てる接し方、話しかけ方を習得する。（野中） 1. 補聴器適合の基本的スキルと、乳幼児・学齢児・青年期の各年代ごとの補聴支援・装用指導について実務上の留意事項を学ぶ。2. 聴覚障害教育について、基本理念・歴史的な経緯・合理的配慮の提供・コミュニケーション指導支援を中心に理解を深める。（本庄） 1. 難聴の原因と分類について、聞こえの状態や主に音声言語の獲得の難しさや特徴と結び付けて学ぶ。2. 難聴児の音声言語の獲得に必要な補聴とその評価や、その評価の土台となる聴力検査について学ぶ。3. 難聴児の療育やその発達支援の実際を学ぶ。（森貞） 1. 聴覚障害領域の復習を行い、ケースワークを通じてその定着を図る。2. 後期開講の補聴器・人工内耳の基礎的な内容を学ぶ。（福田）

■ 到達目標

1. 難聴乳幼児の聴力と耳の聞こえ方との関係が分かる。2. 難聴乳幼児が言語を獲得するには、遊びや生活場面での養育者との自然な関わりが重要と分かる。3. それらの、遊びや生活場面で、どう留意すれば、難聴であるのに言語獲得が可能なのかが分かる。（野中） 1. 補聴器適合に関する具体的操作が説明できる。2. 各年代ごとの留意事項を説明できる。3. 補聴援助機器の役割と適合について説明できる。4. 装用にかかわる理解啓発指導について説明できる。5. 聴覚障害教育の基本理念について理解し、多様な支援の中で自己の役割を説明できる。（本庄） 1. 難聴の分類と聞こえの状態や言語獲得過程の特徴について理解する。2. 発達年齢にあった聴力検査方法や補聴の方法と援助機器にどのようなものがあるのか分かる。3. 難聴乳幼児に対する療育や発達支援の実際を知る。（森貞） 聴覚障害領域全般を概観し、国家試験に対応する知識を整理できる。（福田）

■ 授業計画

- 第1回 難聴児における言語獲得教育の原則を説明する（野中）
- 第2回 感音難聴児の耳の聞こえ方の実際を学ぶ（野中）
- 第3回 感音難聴児の補聴方法を学ぶ（野中）
- 第4回 感音難聴児の言語獲得教育の実際を学ぶ（野中）
- 第5回 感音難聴の乳幼児の言語獲得教育の実際をビデオで視聴する（野中）
- 第6回 感音難聴乳幼児に特有の接し方、話しかけ方を学ぶ（野中）
- 第7回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援：乳児期（本庄）
- 第8回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援：乳児期（本庄）
- 第9回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援：学童期（本庄）
- 第10回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援：青年期（本庄）
- 第11回 聴覚障害教育の基本理念・歴史的な経緯からの考察（本庄）
- 第12回 聴覚障害への合理的配慮・教育における情報保障（本庄）
- 第13回 言語とコミュニケーション指導・支援（音声言語と手話の活用）（本庄）
- 第14回 難聴の分類と原因（森貞）
- 第15回 幼児聴力検査（森貞）
- 第16回 補聴の方法と補聴効果の評価方法（森貞）
- 第17回 聴力の評価を基にした療育や発達支援の方法（森貞）
- 第18回 聴覚障害を来す疾患の復習（1）（福田）
- 第19回 聴覚障害を来す疾患の復習（2）（福田）
- 第20回 聴覚障害の遺伝子診断（福田）

- 第21回 新生児聴覚スクリーニング検査（福田）
- 第22回 聴覚検査の復習（1）（福田）
- 第23回 聴覚検査の復習（2）（福田）
- 第24回 聴覚障害の検査と評価（福田）
- 第25回 聴覚障害の心理的援助・各種助成制度（福田）
- 第26回 聴覚障害児のケースワーク（1）（福田）
- 第27回 聴覚障害児のケースワーク（2）（福田）
- 第28回 補聴器のフィッティングと評価法（福田）
- 第29回 人工内耳のマッピングと評価法（福田）
- 第30回 まとめ（福田）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・事前に授業で使用する資料を配付します。授業までにその資料を30分程度予習しておき、授業で実施した内容を30分程度繰り返し、復習しておいてください。（野中）
- ・該当する内容について事前に教科書に目を通しておいて下さい。（森貞）
- ・耳鼻咽喉科、聴覚障害Ⅰ・Ⅱで学んだ内容を復習しておくこと。（福田）

■ 教科書

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版
 著者名：城間将江 鈴木恵子 小淵千絵
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	補聴器・人工内耳				
担 当 者	竹田利一・福田信二郎			(オムニバス)	
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ・補聴器のフィッティングにおいての総合的な知識を習得し、補聴器適応の決定、補聴器の調整選択、補聴器適合検査の指針について学ぶ（竹田）
- ・人工内耳や残存聴力活用型人工内耳（EAS）、人工中耳（VSB）の仕組みや適応、マッピング、聴覚障害者の臨床の実際について学ぶ（福田）

■ 到達目標

- ・補聴器のフィッティングにおいての総合的な知識を習得し、補聴器適応の決定、調整と選択の基礎、補聴器適合検査結果の評価について説明できるようになる（竹田）
- ・人工内耳や残存聴力活用型人工内耳（EAS）、人工中耳（VSB）の原理を知り、適応や装用、リハビリテーションの内容や進め方を説明できる。補聴器・人工内耳装用者など聴覚障害者に適切な関わり方ができ、必要な（リ）ハビリテーションを提案することができる。（福田）

■ 授業計画

- 第1回 補聴器の種類と仕組み（竹田）
- 第2回 補聴器の性能（補聴器の最新デジタル機能）（竹田）
- 第3回 補聴器に関する測定、JIS、カプラの違い、実耳測定、補聴器特性検査装置を使った実習（竹田）
- 第4回 補聴器調整器の使い方、調整器の意味（竹田）
- 第5回 イヤモールドに関する講義と実習（竹田）
- 第6回 補聴器のフィッティングの考え方（リニア、ノンリニア増幅）（竹田）
- 第7回 補聴器の適応と選択、補聴器装用指導（竹田）
- 第8回 補聴器のフィッティングと評価（補聴器適合検査の指針2010の解説）（竹田）
- 第9回 人工内耳の仕組みと適応について（福田）
- 第10回 人工内耳のマッピングの実際、人工内耳の（リ）ハビリテーション（福田）
- 第11回 残存聴力活用型人工内耳（EAS）、人工中耳（VSB）の仕組みと適応について（福田）
- 第12回 聴覚障害者への支援、聴覚障害児の母親指導について（福田）
- 第13回 補聴器・人工内耳、聴覚障害総復習（福田）
- 第14回 補聴器・人工内耳、聴覚障害総復習（福田）
- 第15回 補聴器・人工内耳、聴覚障害総復習（福田）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

第1回～第8回は、1年時、2年前期に学習した補聴器の仕組み、特性測定の復習をして講義に臨むこと。第13回～第15回は聴覚障害Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、耳鼻咽喉科学、補聴器・人工内耳で学んだ内容の総復習なので、これまで学習した内容を必ず見返しておくこと。

■ 教科書

書 名：補聴器のフィッティングと適用の考え方
 著者名：小寺一興
 出版社：診断と治療社

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	視覚聴覚二重障害				
担 当 者	村江鉄平・ST 教員				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

- ①視覚障害者の概要、特徴等を知り、理解を深める。
- ②視覚聴覚二重障害者の概要、特徴等を知り、理解を深める。
- ③視覚障害者を取り巻く現状を知り理解を深める。(村江)
- ④視覚障害者の福祉施設見学と講義 (ST 教員)

■ 到達目標

- ①視覚障害者（盲・弱視）、及び視覚聴覚二重障害（盲ろう者）への理解を深め、彼らとより良いかわりを持つようになるための基礎的な知識を得る。(村江)
- ②視覚障害者を取り巻く現状を知り、理解を深める。(ST 教員)

■ 授業計画

- 第1回 視覚の基礎・視覚障害者（盲・弱視）とは・様々な見え方（村江）
- 第2回 視覚障害者（盲者）についての理解と支援（村江）
- 第3回 点字への理解（村江）
- 第4回 視覚障害者（弱視者）についての理解と支援Ⅰ（村江）
- 第5回 視覚障害者（弱視者）についての理解と支援Ⅱ・視覚障害者の歩行と安全（村江）
- 第6回 視覚聴覚二重障害（盲ろう者）への理解と支援（村江）
- 第7回 視覚障害者福祉の歴史と現状（ST 教員）
- 第8回 視覚障害者福祉施設の見学（ST 教員）

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜講義中に指示します。
施設見学の詳細は別途連絡します。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	臨床実習Ⅰ				
担当者	大西環・井上直哉・川畑武義・福田信二郎・大根茂夫				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

Ⅰ期臨床実習（見学実習） 設定期間：1 週間

■ 到達目標

言語聴覚士の業務の流れを理解し、関連職種との連携を理解する。

■ 授業計画

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。
 実習協力施設・病院にて、ご指導を頂くスーパーバイザー（SV）の言語聴覚療法を見学させて頂く。
 毎日実習日誌を作成し、提出する。
 SV から与えられた課題のレポートなどを作成する。
 「実習のふり返し」を作成する。
 詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取り組み
 - ② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ③ SV からの種々の情報
 - ④ SV 記載の成績表・所見
 - ⑤ 実習日誌
 - ⑥ 出席状況
 - ⑦ 実習報告会に向けての取り組み
- ①～⑦を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。
 実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル

著者名：小寺富子監修

出版社：協同医書出版社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編

著者名：深浦順一、為数哲司、内山量史

出版社：建帛社

書 名：言語聴覚障害診断 ―小児編

著者名：大塚裕一、井崎基博

出版社：医学と看護社

■ 参考図書

■ 留 意 事 項

出席日数が規定の4 / 5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	臨床実習Ⅱ				
担 当 者	大西環・井上直哉・川畑武義・福田信二郎・大根茂夫				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	5 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

Ⅱ期臨床実習（評価実習） 設定期間：5 週間

■ 到達目標

臨床実習Ⅰ及び学内で学んだ検査手順や評価に関する知識を基に、指導を受けながら言語聴覚療法における検査及び評価が出来るようになる。また、指導援助プログラムの立案について考えることが出来る。

■ 授業計画

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。実習協力施設、病院様にて、ご指導いただく SV の指示、監督のもと、患者（児）様に検査等を行い、その結果を分析して他の所見と併せて総合評価を行う。さらにその評価に基づき、指導援助プログラムを立案する。

実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などをする。

「実習のふり返し」を作成する。

症例報告書を作成する。

詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取り組み
 - ② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ③ SV からの種々の情報
 - ④ SV 記載の成績表・所見
 - ⑤ 症例報告書
 - ⑥ 実習日誌
 - ⑦ 出席状況
 - ⑧ 実習報告会に向けての取り組み
- ①～⑧を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル

著者名：小寺富子監修

出版社：協同医書出版社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編

著者名：深浦順一、為数哲司、内山量史

出版社：建帛社

書 名：言語聴覚障害診断 - 小児編

著者名：大塚裕一、井崎基博

出版社：医学と看護社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の4 / 5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

授業科目	臨床実習Ⅲ				
担当者	大西環・井上直哉・川畑武義・福田信二郎・大根茂夫				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	6 単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

Ⅲ期臨床実習（総合実習） 設定期間：8 週間

■ 到達目標

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。検査及び評価に基づき、指導援助プログラムの立案を行い、言語聴覚療法を指導を受けながら実施できる。

■ 授業計画

実習施設・病院で、臨床実習指導者（スーパーバイザー・SV）のご指導・監督のもと、患者（児）様の検査、評価、指導訓練プログラムの立案、訓練等実際の言語聴覚療法を経験する。実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などを作成する。「実習のふり返し」を作成する。症例報告書を作成する。詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。新型コロナウイルスの感染状況によっては学内実習を行う場合がある。その場合の内容については、講義時間内に周知する。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取り組み
- ② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
- ③ SV からの種々の情報
- ④ SV 記載の成績表・所見
- ⑤ 症例報告書
- ⑥ 実習日誌
- ⑦ 出席状況
- ⑧ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
- ⑨ 実習報告会に向けての取り組み
- ⑩ 学内実習での取り組みと提出物
- ①～⑩を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。
Ⅰ期臨床実習、Ⅱ期臨床実習で明らかになった自己の課題を解決すべく、しっかり準備をして臨むこと。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル

著者名：小寺富子監修

出版社：協同医書出版社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編

著者名：深浦順一、為数哲司、内山量史

出版社：建帛社

書 名：言語聴覚障害診断 ー小児編

著者名：大塚裕一、井崎基博

出版社：医学と看護社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の4 / 5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。